325
528

日本国民と基督教

横田秋生著

始

325
528

THE JAPANESE PEOPLE
AND CHRISTIANITY

日本國民と基督教

日本聖公會出版社

325-528

THE JAPANESE PEOPLE
AND CHRISTIANITY

日本國民と基督教

横田秋生著

大正
8. 9. 10
內交

謹んで
此小著を我日本聖公會創立滿三十年記念傳道の爲に獻ぐ。
神の恩惠によりて福音宣傳の一助とならん事を祈る。

救主降世一千九百十七年七月　著者

序

友人横田秋生君は、よく論じよく書く人である。啻によく論じよく書くのみならず、叙述明瞭筆勢壯烈、進んで敵陣に逼るの概がある。本書の如き、一小短篇に過ぎずと雖ども、明に君が有する特長の一端を表示して居る。

基督教が新らしき邦土に入るや、必ず其邦土特有の思想に逢着して茲に一の衝突を來たすのである。時には此衝突の渦中に葬られて起つ能はざる場合もあり、或は勇往邁進凱歌を擧げて難局を切り拔くこともあり、或は軋轢の末其原質を失はずして變形調和し、新しき流域を見出して進歩展開することもある。惟ふに新邦土に於ける基督教の運命は基督教を傳ふる人が其邦土の思想に對して如何なる態

緒言

此小著は、神の恩惠によりまして、私が傳道者としての十年間の經驗から獲たものを綴つたのでありますが、聖書之研究誌、福音新報、基督教大辭典、哲學大辭典、其他多くの著書を參考としましたので、其等に負ふ所極めて多いのであります。けれども今一々之を書中に明記しませんが、其著者に對しては深く感謝の意を表する次第であります。

又立教大學校長元田作之進博士が、御多忙中にも係はらず、御校訂の勞を與へられました事を、併せて深謝いたします。

此小著を讀まれました御方は、更に進んで近所の基督教會の牧師傳道者諸氏、又は熱心な信者を尋ねられて、基督教の大要に就て研究せられ、心に良しとせられた時に、神の御導きを受けて信仰の生涯に入らるゝに至らん事を、我が愛する日本國の將來の爲に、我が信ずる神に切に願ひ祈る處であります。

大正六年七月二十二日
亡母八週年記念の日

京都大佛東の寓居にて
横田秋生

度を取るべきかに依つて定まるのである。

横田君は此小冊子に於て日本に於ける各種の思想を捕へ、攻擊すべきものは遠慮なく攻擊し、握手すべき所には親しく握手し、調和すべき點に於ては又快く調和し、以て基督教の立脚地を明かにせんことを努められたのである。此の如き著書が我國の傳道界に裨益する所多きは言ふまでもないのである。一言を附して君の勞を謝す。

大正六年初夏

東京市外西大久保
元田作之進

目次

第壹章　西力東漸の次第……一頁
第貳章　基督教の渡來と其影響……四
第參章　新日本の基督教傳道……一七
第四章　時代思潮と基督教……二九
一　唯物思想と基督教……二九
イ　唯物論……三〇
ロ　進化論……三三
二　社會主義と基督教……四〇
三　忠孝問題と基督教……四三
一　教育道德宗教との關係……四四

二　祖先崇拜と基督教……四八
三　基督教は孝道を尊重す……五三
四　基督教は忠君愛國心を聖別す……六〇
五　我國體と基督教……六八
第五章　神に關する思想……七四
一　新宗教樹立運動……七四
二　不可識論……七五
三　自然神教（超絶神教）……七六
四　萬有神教（汎神教）……七七
五　唯一神教（附基督教）……七九
第六章　人生と宗教……八三
第七章　志道の精神……九三

日本國民と基督教

横田秋生著

第壹章　西力東漸の次第

今や基督教も外來の宗教でなく、我等日本人の宗教となつて、新生命を我國民に供しつゝありますが、我日本國民と基督教との關係を說く前に、其傳承に關する史的研究をする事は興味深い事と思ひますから之を記して見ませう。

神武天皇が我大八洲の國を平定して其統一を計り、皇都を大倭の橿原の地に奠めて、建國の基礎を置き給ひましてから、九百四十五年即ち應神天皇の十五年に、朝鮮の百濟國から博士王仁と云ふ人が來まして、朝廷に論語十卷と千字文一卷を獻じました。この以前に

漢字は民間に流布して居たらうと思はれますが、公に儒教が傳來したのは此時が始めであります。それから二百三四十年經過して繼體天皇の御代に、同じく朝鮮から佛像を持つて來て民間に傳へましたので、時人は是を韓土神と申して居りましたが、欽明天皇の十三年（紀元一二一二、西暦五五二）には、百濟國から佛像、幡蓋、經論を朝廷に獻じて其功德を稱讃ました。是が公に佛教が渡來した始めなのであります。是が爲に物部氏と蘇我氏との爭論が起りまして、遂に蘇我氏は勝利を得ましたが、佛教に熱心な聖德太子の御蔭で、其後佛教は益々興隆の運に向ひました。日本古來の敬神思想と共に佛教は弘く人心に迎へられまして、日本人の宗教となりました。

支那との交通は古い昔から行はれて居ましたが、まだ西洋の諸國には知られて居りませんでした。處が我日本國の事が始めて西洋人に紹介せらるゝ樣になつたのは、弘安四年（紀元一九四一、西暦一二八一）に我國を攻め

て大敗した彼の元の世祖忽必烈に事へて居た、伊太利人のマルコポロが著した東洋見聞錄に依るのであります。是には我國をジパングとしてありますが、支那の國音で日本國をジープンコーと申しましたから、それから轉訛したのでありませう。このジパングは黃金國の如くに記され、印度の東の方に在る島の如くに思はれましたから、歐洲人は是を以て世界の寶庫と信じ、此蓬萊山の探檢に出懸けて一功名せんと思ふ者も澤山出來ました。是等が動機ともなつて、ヴスコダガマは喜望岬を廻航して印度に來ましたし、コロンバスは北米大陸を發見するに至りました。（齋藤阿具氏「西力東侵史」參考）

そして我國に外國人が始めて來ましたのは、今から三百七十五年前、後奈良天皇の天文十一年（紀元二二〇二、西暦一五四二）將軍足利義晴の時代に、葡萄牙人アンニオ、ダ、モッタ。フランシスコ、ゼーモット。アントニオ、ペイキソットーの三人であります（普通にはゼントー、ゼーモト、ポレルロの三人としてありますが「聖書之研究」第廿五號山縣五十雄氏の研究に依る）。

彼等が暹羅から支那に航海の途中で難破して種子ヶ島に漂着し、島主時堯に面謁し鐵砲を傳へたのであります。この天文十一年は德川家康の生れた歳であります。それから三人が歸りまして、日本發見の報が傳はると共に支那や海峽地方や印度方面の葡萄牙人の間に、其話が傳播して其等の殖民地から多くの商船が九州に來る樣になり、從つて西洋文明に接する機會が與へらるゝに至つたのであります。

第貳章　基督教の渡來と其影響

印度の佛教が支那朝鮮を經て我國に輸入されましてから、凡そ一千年ばかりを過ぎまして、後奈良天皇の天文十八年（紀元二二〇九年、西曆一五四九）に、羅馬加特力教會（天主公教會）の一派たるゼスイット派（イエスイト社）の宣教師、西班牙人フランシスコ、ザビエーは、始めて我國に基督教を傳へたのであります。

是れより先、葡萄牙人は印度の臥亞に東洋貿易の根據地を得ましたが、フランシスコ、ザビエーは、イエスイト社の創立者イグナシウスロヨラに知られて、其派の宣教師となり、葡萄牙王ジョン三世によつて印度の臥亞に送られました。そして此附近の布教に從事して居ましたが、此時に薩摩の武士でアンジロー（或は大和の醫師丁西といふ説もあり）と云ふ者が人を殺して、葡萄牙商船に援けられてマラッカに來て居りましたから、彼れから日本の事情を聞いて其傳道心が燃えましたので、彼を臥亞の聖パウロ學校に送つて教育を受けさせました。六ヶ月の後に葡萄牙語や基督教の大要を知つたので、監督ドム、ジャン、ダルブケルクから洗禮を受けてパウロといふ教名を貰ひ、其從者と他一人の日本人と共にザビエーに從つて日本に歸りました。九月十五日（或は云ふ八月十五日）薩摩の鹿兒島に着して國主島津貴久に謁して、前の罪を懺悔し其赦免を得、更にザビエーを紹介しました。ザビエーは國主に面

して布教の許可を得ましたが、佛教徒の反抗によりて暫くにして禁止されましたから、肥前の平戸に行きました。其處で傳道する内に京都に上つて日本の天子に保護を得たいと思ひましたが、應仁大亂後の事とて其目的を達する事が出來ませんでした。歸途山口で大内義興の許可を得て傳道し、また豐後の大友義鎭の城下でも傳道しました。天文二十年十一月日本を發して印度に歸り、翌年支那に赴く途中廣東で病死しました。ザビエーの傳道は僅かに三年でありますが、彼と共に來ました宣教師コスム、ド、トレー及びジャン、フエルナンデス等や、更に臥亞から來た三人の宣教師等は九州に傳道しまして、松浦、有馬、大村、大友の諸大名を始め、多くの信徒を得ました。然し是等の大名はむしろ葡萄牙の商船と貿易して巨利を得るには、宣教師を優遇するに限ると思つたらしいのであります。又彼の三好修理大夫長慶(ミヨーシン、ドノ)、松永彈正久秀(タザン、ドノ)等も信者と

なつたとの話であります。

正親町天皇の永祿十一年(紀元二二二八、西暦一五六八)九月、宣教師ウルカンは京都に來まして、織田信長に謁し布教の許可を請ひました。信長は比叡根來の僧兵の勢力を殺がん爲に之を許し、其上に京都に永祿寺を建てました。時人は之を南蠻寺と申しました。天正十年(紀元二二四二、西暦一五八二)信長は明智光秀に弑せられましたが、此歳大友、有馬、大村の三大名は、伊東義賢、千々岩清左右衛門(僅かに十五歳)の二人を使者として羅馬に派遣しました。彼等は宣教師に伴はれて法王グレゴリオ十三世、シクスタス五世に謁して八年の後に漸く歸國しました。

豐臣秀吉の時代には初は寛容でありました。秀吉の宮中にも信者もあり、高山飛彈守友祥(ジユスト)、小西行長(ドン、オーギユスチン)、黑田孝高(シメオン如水)、其子長政、長岡越中守藤孝、浮田秀家、津田國定、岡野越前守、大久保忠隣、宗義智、常光尼(淀君の妹)なども信者となり、加藤

清正夫人夏野、明智光秀の女で細川忠興夫人（ガラシア）も、熱心な武士的信者でありました。秀吉或る時宣教師に向ひまして、『耶蘇教を信仰してもよいが一夫一婦の制では困る、もし妻妾を澤山持つ事を許さるゝならば改宗してもよい』と申した程であります。然るに天正十五年に至りまして其政策を變じ、嚴禁の態度を取つて南蠻寺を廢し、高山右近の領土を沒收し、宣教師を追放し、佐々成政に死を命じました。慶長元年（紀元二二五六、西暦一五九六）になりまして一の事件が起りました。それは比律賓群島のマニラから墨西哥のアカプルコに行くサン、フエリップといふ西班牙の商船が、航海の途中難船して浦戸港即ち今の高知に入港しました。處が土佐の國主は國法であるといつて其荷物六十萬クラウン即ち日本の金で百五十萬圓程のものを沒收しました。船長は大に苦情をいつて抗議を申込み自ら京都に往つて秀吉に事情を訴へたのであります。そこで増田長盛が取調べました處が、其時

にサン、フエリップ號の水先案内が愚かにも増田長盛を威服する積りで、世界の地圖を見せて西班牙の領地の大なる事や國の富んで居る事などを話しました。増田は如何して西班牙が此等の國國を征服したかと聞きますと、彼は得意になつて申しますには、我國の王は先づ宣教師を諸外國に送つて耶蘇教を說かしめ、信者が多く出來た頃を見計つて軍勢を送り、國内の信者と力を併せて其國を亡ぼすのであると答へました。それで増田は大に驚いて早速此事を報告しましたので、秀吉は大に怒つて船の貨物は悉く沒收し船長をマニラに追ひ返しました。翌年には長崎で宣教師二十六人が磔刑に處せらるゝに至つたのも、是の水先案内の言葉が祟をなしたのであります。秀吉は慶長三年に薨じましたので、又局面が一變するに至りました。

此頃には羅馬教會内のゼスイット派の外に、オーガスチン派（西暦一二一〇年頃伊太利アシジの聖フランシスコによりて創立）、ドミニ

三年頃亞弗利加セツポの聖アウガスチヌスによりて創立）、フランシスカン派（西暦四二

カン派（同年頃カラルエガの聖ドミニコスによりて創立）などからも、澤山の宣教師が來て居まして、弘く日本の各地に傳道せられて居ました。

後陽成天皇の慶長五年（紀元二二六〇、西暦一六〇〇）に、關ヶ原の一戰によつて德川氏勝利を得ましてから、世は德川の天下となりました。家康は始め宣教師を利用してマニラとの通商貿易の道を開き、又墨西哥から鑛夫五十人を聘して金銀山の開拓に從はしめ、大久保長安をして之を司らしめて大に富を致したのであります。が慶長十六年には遂に其寛容な政策を變じて天主教を嚴禁し、宣教師を海外に追放し、有馬晴信に死を命じ、内藤如安、高山右近友祥其他百餘人を呂宋に放逐ちました。寛永六年家光の代には海外との貿易を禁じ、たゞ支那と和蘭の商船の來るのを許すのみで、大船を作つて外國に行く事も出來なくなり、一方には踏繪令を發して人民の信仰を試驗し、佛教に改宗せしめました。一説によれば是は慶長十四年に始めて我國と交

通した和蘭の商船が、自分は羅馬教會に反抗して起つた新教を奉ずる國民であるから、羅馬舊教を奉ずる西班牙や葡萄牙人の商船を排斥して、其貿易の利を一手に占めん爲に、舊教徒の陰謀を密告したのに由るとも云ひ、又大久保忠隣及び大久保長安の陰謀事件に關係して居るとも傳へられて居ります。

其頃西班牙のフランシスカン派の宣教師ソテロは、仙臺に來まして伊達政宗に謁しました。政宗は大に喜んで外國の事情を聞いて、慶長十八年雄圖を懷いて其家臣支倉常右衛門をソテロと共に羅馬に使せしめました。常右衛門はソテロと共に西班牙に行き國王ヒリップ三世に謁しました後、羅馬に行き法王ポール五世に謁見して、元和六年歸國しましたが、此時は既に國情は一變し、政宗も亦寛永十三年に死にました。

明正天皇の寛永十四年（紀元二二九七、西暦一六三七）十月には、島原天草の耶蘇教徒

は有馬古城に據つて亂を起しました。是は迫害の甚だ猛烈なのと、領主松浦氏の虐待に堪へないのと、世界の大審判と基督再臨の信仰が教徒間に起つた爲めと、益田四郎時貞といふ美少年をば神の使者と迷信したのと、小西、加藤、浮田其他の諸大名の殘黨が、之に加はつたのとによりまして、遂にかゝる大騷亂になつたのであります。此時に和蘭人は幕府を助けて大砲や彈藥や船舶等を供給し、松平信綱は之を鎮定まして、翌年二月廿八日城は遂に陷りました。是からは愈々葡萄牙や西班牙の船舶や宣教師の入國を嚴禁し、和蘭人は貿易の權を得て、長崎出島に居を定めました。新井白石の說によりますれば、德川時代の天主教嚴禁によつて、殺された信徒が二十八萬人、佛教に改宗した信徒が二十萬人あつたといふ事であります。

それから凡そ二百二十年間は外國宣教師は來ませんでしたが、安政五年（紀元二五一八、西暦一八五八）に佛國との條約成り、再び天主教の宣教師が來ま

して横濱長崎に滯在し、慶應元年二月には長崎に一會堂が多くの殉教者の爲に建てられました。一ヶ月の後に浦上から三人の婦人が來ましたが、四月の復活節には千五百人の信徒が來り集ふたとの事であります。迫害は盛んで禁は重くとも死を決して猶も其子孫が相繼いで二百三四十年間も、其信仰を維持して居たといふ事は大に驚くべき事實であります。明治の初め頃迄は此附近の信徒は大なる迫害を受けて居りました。今日となりましては我國では基督教會の中でも、一番信徒の數も多くあります。

天主教とは葡萄牙語で神の事を**デウス**と申しましたので、テンスと音讀するに至り、**バテレン**（伴天連）とは宣教師の事で、（葡萄牙語のパトレーは羅甸語のパテル即ち慈父の義であり、**キリシタン**（切支丹）とはキリスチャン即ち基督信徒の事を意味するのであります。此時代に魔法を使つたのではなくて、歐洲は科學の知識が進歩して居ま

したから、色々物理化學上の理法によつて行つた事を、何か特別の奇蹟の如くに世人が思つたのでありませう。

想ふに基督教最初の渡來時代には、**羅馬法王**アレキサンダー六世（西暦一四九三）が、大西洋上アゾール諸島の西方三百英里（後に八百英里）の處に南北に分界線を引いて、此線から以東に耶蘇教の君主を戴かない國土を發見した時には葡萄牙の領とし、以西に發見した時には西班牙の所有とするがよい（「西力東侵史」十六頁參照）但し耶蘇教を宣傳る義務があるとの允許を與へましたから、各自が領土擴張と共に新開地によつて貿易上の巨利を占めるのとにより、又政治家は宗教を利用して其目的を達せんと計りました。故に葡萄牙人は東洋に向ひて領地を得、西班牙人は北米大陸の方に領地を得ました。其領土の大と共に他國の領地を侵略する事を罪惡とも思はないで、法王の允許を幸ひにして眞面目な宣教師を手先に使つて其野心を遂げたのでありませう。西班牙の

東洋貿易などは總て政府の事業で、之に從事する者は皆政府の役人でありました。故に我國に來ました時も此筆法を用ひやうとしたのかも知れませんでしたが、神は我國を守護し給ひまして斯る事を許し給ひませんでした。そして是の葡萄牙や西班牙も漸次に和蘭や英吉利などの爲に其領地を奪はれ、今は實に貧弱な國となりました。

又當時のゼズイット派は、西班牙の貴族**イグナシウス、ロヨラ**によつて剏められたもので、西紀一五四三年に羅馬法王パウル三世の認許を得て其團體を『**耶蘇の盟社**』と命名して、各地の傳道を試みたものであります。けれども此派は自派の權力と富とを增大んとするに在つたので、此目的を達する爲には戰爭を挑發し、一揆を助け、暗殺を行ひ、政府を顚覆せしむるも敢て厭はないといふ主張を有つてゐた樣に見えました。それですから同じ羅馬教會內の他の派を始め、第十六世紀に羅馬法王に反抗して起つたプロテスタント教（新教）、

及び一般の宗教反對者も、此派に對しては疑惑と反對とがあつたのであります。其結果は歐羅巴を始め印度、支那、日本、亞米利加等に至るまで、何處に於ても其事業は失敗に終りました。之は其傳道地の國民の靈的利福にあまり重きを置かなかつたからでもありますが、元來が其動機が正しくなく、其手段を誤つて居ましたから、神の聖意を遂行する使命に缺て居たのであります。故に神は人の手を以て其誤れる傳道を禁じ、之をして不成功に終しめ給ひました。善良な目的を達する爲には、必ず善良な方法に依らねばなりません。

然し今日の羅馬天主公教會は、穩健着實な傳道を以て我日本國民の靈的救濟の爲に努力しまするし、昔の如き野心は更に無いのであります。又今の佛蘭西、伊太利、西班牙、葡萄牙の舊教を奉ずる國民の主權者も、斯の如き政策を執らないのでありますから、安心して其教ふる處に從ふ事が出來るのであります。我國民が今日に至る

迄も猶舊時の基督教の如くに思ふのは時勢を知らないからの事であります。

第參章　新日本の基督教傳道

今を去る事六十四年前、孝明天皇の嘉永六年（紀元二五一三）六月九日德川將軍家慶公の時代に、北米合衆國の水師提督彼理氏は、軍艦蒸汽船各二隻を率ゐて突然相模の浦賀に來まして、砲聲一發天地に轟かせましたが、是ぞ我新日本誕生の紀元でありました。彼理は大統領フイルモアー氏の國書を將軍に呈して、新に通商貿易等の事を請ふたのでありますが、十日にして去りました。けれども國民にとつては長夜の夢を醒まされたのでありまして、上を下への大騒をしたのであります。此時の狀態を歌つた俗謠にこんなのがあります、

泰平の眠を覺す正喜撰（蒸汽船）、

たつた四はい(四艘)で夜も寢られぬ。

翌安政元年正月十一日、更に堅艦八隻を率ゐて再び來り、當時の横濱村で幕府の代表者林大學頭等と會見しました。其時に大統領フィルモア氏から十三代將軍家定公に、贈物三十品を齎らしましたが、それは蒸汽車一式、電信器械、望遠鏡、農具、羅紗、天鵞絨、酒、書籍十六冊等の類で、多くは當時の西洋文明を代表したものであつたさうであります(「聖書之研究」二九一號二八七頁)。それで三月三日に神奈川條約に調印が出來て、下田函館の二港を開く事になりました。翌三年七月十九日には米國總領事タウセント、ハリス氏が來まして、下田に在つて通商條約の議定を求むること二年、安政五年六月十九日大老井伊直弼は、勅許を俟たないで米國との通商假條約を締結び、次で和蘭露西亞、英吉利、佛蘭西の四箇國にも之を許しました。是が爲に國論大に沸騰し、尊皇攘夷の說が旺んであつて、井伊大老は水戸藩士

佐野竹之助等十七人の爲に、櫻田門外の雪に其鮮血を染むるに至りましたのが、萬延元年三月三日の事でありました。

是れより先、安政四年九月米國軍艦ポーツマウス號は下田に來り、後函館に碇泊しましたが、此時に之に乘組める一士官は、日本傳道に關して在上海の宣教師に一書を送り、支那監督ブーン師は之を米國聖公會傳道會社の機關誌に寄せました。茲に於て米國聖公會傳道會社は當時支那に傳道中のリギンス。ウ井リアムスの二氏に、日本傳道の大任を荷はしめました。リギンス氏は病氣療養の爲め既に安政六年五月二日に長崎に上陸して、病氣の療養中でありましたが、ウ井リアムス氏は同年六月廿七日、米國大統領の切に贈らん事を欲し、日本の政府は之を受ける事を甚だ好まなかつた一卷の聖書を手にして、長崎港に上陸したのであります。是ぞ我新日本が靈的曙光に接した始の日であります。

尤も總領事兼全權公使ハリス氏は熱心な米國聖公會員で、氣品高き紳士、敏腕なる外交官でありました。彼は在留中にも主日を嚴守り、又米國聖公會祈禱書で常に禮拜して居たとの事で、其日記にも『思ふに日本に於て、上帝に祈禱を捧ぐるため此書を使用したものは自分を以て嚆矢とするであらう、此後聖別した日本に於ける教會で、同一の祈禱書を以て祈禱を捧ぐる日は幾年の後に來るであらう乎』とあり、又幕府に對しては切支丹宗禁制の法令の撤去、信教自由の許可に就て幾度も勸告しました。そして日米和親の通商條約が調印された後八月一日の日曜日には、下田港に碇泊して居た米艦ポウハタン、ミシシッピー兩號の士官水兵を召集めて、嚴肅な感謝禮拜式を執行つたといふことであります。（「老監督ウ井リアムス傳」參照）

米國聖公會（西暦一六〇七年英國から米國バアジニヤ州ジエームスタウンに殖民せられた時に、其基礎が据ゑられましたが、一七八九年の總會に於てプロテスタント監督教會の名稱の下に英國聖公會から獨立したのであります。）からはリギンス、ウ井リアムスの二氏が派遣されました

たが、リギンス氏は僅か十ケ月で歸り、ウ井リアムス氏一人止まりて其使命の爲に盡す事になりました。是に續で**米國長老教會**（西暦一五六〇年ジョン、ノックスが蘇國に建設したもので瑞西のツイングリーやカルビンの長老主義を採用したものであります。米國の長老教會は蘇國や英國又は和蘭の長老教會の系統で一六二八―二九年頃に出來、一七八九年に總會を開きましたが米國には長老主義の教會は十三派もあります）からは**ヘツボン氏。米國レフオルムド教會**（西暦一五二〇年獨逸のルーテルが羅馬教會に反抗して宗教改革を致しました時、之に對してカルビンの神學説及び長老主義によつて建てられたのが即ち改革教會であります。米國では一六二八年和蘭の移住者によりて建設され一八六七年米國レフオルムド教會と稱しました）からは**ブラウン。ブルベツキ。シムモンス**の三氏が派遣されました。翌萬延元年には**米國浸禮教會**（西暦一五二三年頃瑞西に於て現はれ獨逸其他歐洲英國等にも盛になり、一六三〇年頃米國にも傳播したのでありますが、米國では十四派もありメソヂスト教會に次で盛であります。）からは**ゴブル**氏が派遣されました。それから續々に諸教派の宣教師が參りました。

露國正教會（基督教會が最初エルサレムに建設されましてから希臘、羅馬、英國にも傳はりましたが、コンスタンチノープルを中心とする東部の教會はローマを中心とする西部の教會とは思想や信仰に於て幾分相違がありましたが爲に、一〇五四年七月十六日遂に互に分離しました。英國教會は五九六年羅馬教會からオーガスチンが來てアングロサキソン人に傳道して遂に其勢力圏内に入りましたが、一五三三年ヘンリー八世の時に羅馬法王の支配權を非認しましてからは、一五二〇年マルチン、ルーテルの宗教改革と同じく羅馬教會からはプロテスタント即ち反抗者と目されたのであります。從つて羅馬教會を舊教と云ひ、プロテスタント教會を新教と申しますが、英國聖公會は東部の希臘正教會と同じく使徒時代からの繼承の教會であります。故に舊教でも新教でもないのであります。この希臘正教會が露國に入つたのは一五八二年

で一七二一年には獨立）からは宣教師としてニコライ氏が派遣されて、文久元年六月函館に着し、其傳道に從事しました。

此頃はまだ基督教傳道の門戸は閉鎖されて居ましたので、一方ならず苦心したのであります。剩さへ羅馬天主公教會に對する從來の惡感がまだ取去られず、迫害が盛んで、一般人民からは宗旨證文を差出さしめて、切支丹宗徒でない事を證明せしめたのであります。

切支丹宗門は累年御制禁たり、自然不審なるもの有之者申出づべし御褒美として

銀五百枚　ばてれんの訴人
銀三百枚　いるまんの訴人
銀三百枚　立かへり者の訴人
銀三百枚　同宿並宗門の族訴人
銀百枚　右之通可被下たとひ同宿宗門の内たりと雖ども、訴人に出る者品

により銀五百枚可被下、之をかくし置き他より顯はるゝに於ては、其所の名主並に五人組迄、一類共可處罪科者也、仍下知件如。

といふ高札が各所に立られて居たのであります。

徳川幕府倒れて王政維新の大革命となり、政治機關の改造が行はれたのみでなく、萬事が根本的に一新せられました。明治元年（紀元二五二八西暦一八六八）三月十四日、明治天皇は京都二條城に於て、天地神明に誓つて『五箇條の御誓文』を御發布になりました。其中に

舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし、
知識を世界に求め、大に皇基を振起すべし、

とありまして、この御主旨に從つて政府の役人を始めとして、人民一般も大に努力して、風俗習慣の改良から、西洋文明の輸入に至るまで、非常の變化を來すまでに進みました。然しながら基督教に對しては依然たる有樣でありましたが、明治四年の末、岩倉大使一行

が米國から歐洲の方に參りまして、條約改正の談判をしようと致しましたけれども、到る處で基督教迫害の事を以て輿論の痛擊に遭ひましたので、早速政府に電報を以て禁制の高札を撤去る事を請求せられました。明治六年二月十九日になつて愈々高札が廢止せられました、それには左の如くに書いてありました。

切支丹邪宗門の儀は堅く御禁制たり、若し不審なる者有之ば其筋の役所へ申出づべし、後ほうび下さるべく事　太政官

かくして傳道上の一大障害は取除かれたやうでありますが、實際は仲々困難でありまして、信者になるには決死の覺悟でなければならなかつたのであります。外國からも宣教師は續々來りまするし、日本から米國や歐洲に往つた人も歸りますし、又宣教師は學校を開いて教育に從つたりしましたので、段々と傳道の門戸も開け、信者も出來て各所に教會は建設され、名士も澤山輩出する樣になりまし

た。是等の人士が其頃の社會のあらゆる方面との論戰に對抗して、破邪顯正の爲に奮鬪し、眞理の宣傳に努力いたしました。

明治二十二年（紀元二五四九西曆一八八九）二月十一日の紀元節に東京宮城に於て、大日本帝國憲法七十六箇條を御發布に成り、國家の隆昌と臣民の慶福とを望まれました。歐洲諸國では壓制暴虐の政治に對して、人民の權利と自由とが要求せられて流血の慘を見た後に、漸く憲法を得たのでありますが、我國民は幸にしてかゝる流血の慘事なくして平和の裡に此大なる恩典に浴しました事は、大に感謝せねばなりません。然しそれと共に人民に自由民權の深い政治思想がありませんから、此憲法を活かして用ひる事が割合に少ないのは、遺憾の事であります。そして其第二十八條には、

日本臣民は安寧秩序を妨げず、及び臣民たるの義務に背かざる限に於て信教の自由を有す。

と明かに宗教上の信仰の自由が與へられました事は、基督教傳道には非常な幸福であります。次で二十三年には帝國議會は開かれまして、人民の代表者が國事を議する事が出來る樣になり、同じ十月三十日には教育に關する勅語を賜はり、國家教育、國民道德の範を示されました。かくして明治初年の五箇條の御約束を御實行になりました。

政府が宗教上に對して執りし政策を見ますれば、始めは所謂神道に重きを置いて佛教を疎外し、基督教には大なる壓迫を加へました。後ちには佛教は公認されて教部省は變じて內務省に社寺局が置かれるやうになりました。然し民の心は法律や軍隊や警察の力で取締る事も出來ず、其改善を計る事も困難である事が分りました。其上に日清戰爭や北淸事變並に日露戰爭の三大戰役によつて、世界的協同の大精神を呼吸し、今日迄の迷夢は漸く醒めて、基督教に對する感

情に大變化を來し、宗教利用策は行はれて神社と宗教とを區別し、神社局と宗教局を置く樣になり、基督教傳道にも大に便宜を與へました。然るに教科書事件、日糖事件、海軍收賄事件、代議士瀆職事件、大逆事件等を始め、軍人、官吏、教育家、宗教家、銀行會社の重役等の犯罪、青年男女の墮落、自然主義文學の中毒による社會の腐敗に對して、所謂金科玉條の忠孝道德の日々に廢れ行くを見ては、國民道德の破產を感じて涙なき能はず。然も在來の宗教も其權威を失ひて國民の靈的生命の救濟力に缺けて居るのを觀ては、一大宗教の權威に信賴し、其活力に觸れて國民に新生命を與へん事を冀ひ、且つは基督教五十年間の貢獻を思ふては、茲に心機一轉して三教會同の企てとなり、基督教採用すべしとの說が盛になつて來たのであります。そして宗教は教育と深い關係のある事を思ふて宗教局を內務省から文部省の所管に移されました。

社會の所謂知識階級には今猶ほ宗教不必要論を唱ふるものもあり、基督教は我國體に反して害ありと叫ぶ人もあり、一般民衆はと見ますれば、迷信は盛んであつて、結婚其他人事の重大なる要件に就て、一本の卜占によつて其運命を左右せられて居ります。或は信仰心もなく道德心もなくして無意義に人生を送り、人々の厄介となり、國家社會に害毒を流す者も多くあります。日本古來の武士道的精神も日々に衰へて、不正商人は海外に信用を墜し、成金黨や政權黨は盛に遊蕩の標本を示して新進の青年を誤らしめて居ります。加ふるに大正四年夏以來の歐洲大戰爭は、我國民に甚だ大なる刺戟を與へたのであります。茲に於てか我等は我日本に於ける基督教の使命に就て、一層痛切に感ずるのであります。依て時代の思潮の或物に對して我等の立場を明にしたいと思ひます。

第四章　時代思潮と基督教

一、唯物思想と基督教

明治の初年に方りまして、當時の學者河津祐之氏は米國の動物學者エドワード、エス、モース氏と共に、我東京の帝國大學の教室に於て其學生に對して、唯物論及び進化論を講義して痛く基督教を攻擊せられましたから、其教育を受けたものが多くは唯物思想に心醉して居ました。それから中江篤介(兆民)氏も大に無神無靈魂を唱へ、其歸依者も多かつたのであります。殊に法學博士文學博士男爵加藤弘之氏は、進化論の劍を採り國體論の楯に據つて、日本に於ける基督教の害毒を痛論し之を粉碎せねば止まない決心でありました。其八十歳の賀宴に於て『予は元來の宗教嫌ひで、宗教では耶蘇教は最も嫌ひである、之は我國に害あつて益が無い、予は之を退治せんとて年

來努力しました』と述べられたと云ふ事でありますから、之が爲にどれ程苦心せられたかゝ分ります。そして我國では其地位と肩書とによつて此說に聽いて、其熱心な弟子になつて基督敎攻擊をした人も澤山ありました。けれども其眞面目な熱心な努力も徒勞に歸して、却つて基督敎の善い援けとなつて其進步を增さしむるに至つた事は、深く感謝すべき事であります。けれども是等の人々によつて唱へらるゝ唯物思想が果して我國を益するか、國體を擁護するに足るかに就て話して見ませう。

(イ) 唯物論

希臘の哲學者タレースが宇宙の根本物質を水と解釋しましてから、デーモクリトスの元子論(アトム論)に至つて唯物思想の端を開き、次第に其思想は盛になりまして、第十七世紀の頃英國のホッブスに至つて有力な學說となり、近代は獨逸のヘッケルが『宇宙の謎』に之

を說きましてからは、更らに世人に迎へられたのであります。

唯物論者はこの宇宙といふものは唯盲目的の勢力と無感覺の物質とがあるのみで、それが機械的に自然法によつて活動するのみであると說きまして、此世界には神も無ければ靈魂も無い、愛も無ければ目的も無いと主張するのであります。人はたゞ其本能に從つて生活すればよいので、人には自由と云ふものは少しもないから、唯冷かな天然の法則が命令する處の運命に從ふより外には途がないと申します。それでありますから宗敎とか道德とか云ふものを無視して、肉體の慾望の滿足を追ひ求めたり、人を倒しても自分が思ふ通りをやればよい樣に說きますので、大層人が喜びまするが、さて是が學說としてはそれでよいとしても、それをその通りに實行する樣になりますと大變な事になります。それで所謂肉慾本能を說く自然主義や快樂主義となり、自己を中心とする個人主義となり、國家や人民

を眼中に置かない無政府主義となり、或は人を人として尊敬する念も薄くなり、義理や人情といふものを排斥し、法律や道德の制裁に服從ふ事を馬鹿らしい事とし、人は唯動物的に生活すればよい樣になるのであります。それ故に唯物論に從へば、私共は意味の無い宇宙に生活し、目的の無い人生を送り、價値の無い生涯を終らねばならぬ事になりますから、是では人として生れた甲斐も無くなり、絕望の人となるのであります。羅馬の哲人セネカが申しました樣に『最も幸福なのは生れなかつた事で、其次に幸福なのは一日も早く死ぬる事である』といふ事に結着します。

それのみでなく唯物論を結局まで考へて來ると、人間を智慧のある動物扱ひにするのでありますから、死んでも別に悲しむ事も要らず、それを犬猫同然に取扱ふ事になり、從つて先祖の靈を尊敬するといふ事も間違となり、國の爲め世の爲め人の爲に力を盡して之が

爲に死する犧牲の精神も不必要となり、尊皇愛國の心念も消滅するのであります。世の中で何が恐ろしいかと云へば、この無神無靈魂主義を實行する人であります。無宗教無道德の人は國家社會の最大危險人物であります。これは人類の大敵であります。今日まで多くの知名の士に犯罪者が出來たのも、畢竟はこの唯物思想の實行から來たもので、近來無教育のものよりも却て教育ある人の方が恐ろしい犯罪をする者が多いといふのも、所謂上中流の階級に却て不品行者が多いといふのも、この唯物主義教育の弊害であります。

(ロ) 進化論

生物進化の說を初めて唱へましたのは佛國の哲學者デカルト(西紀一五九六—一六五〇)で、一七七四年ロード、モンボードーが『人間の祖先は猿類から進化したものではあるまい乎』と考へ、一八〇九年ラマルクは動物進化說を發表しましたが、一八五二年にはスペンサーも宇宙や生物

及び社會に關する進化論を著しました。英國の生物學者**ダーウ井ン**が軍艦イーグル號に乘つて世界の各地に於て、生物進化に關する研究をして歸りますと、**ウオーレス**といふ人から進化に就ての論文を寄せられた處、自分の考へと一致して居たので一八五八年七月進化の理法を發表し、翌年には多くの實例によつて『種の起源』を公にし、更に人類の由來に關しても發表しましたから、一時歐洲の學界を搖動し、基督教と大衝突するかの如くにも考へられました。それから益々學者の研究が旺盛になつて、人爲陶汰說、自然淘汰說、唯雄淘汰說、遺傳說、變化說、補足說、代用說、或は共同祖先說などと色々論ぜらるゝに至りました。又天文學や地質學の研究も之に伴ふて盛になり、宇宙進化に關する新說も續々出る樣になりました。そして現今では宇宙、生物、人類に於ける進化の理法の存在する事を疑ふものもなくなりました。これは確かに學界の一大發見であつ

たと深く感謝するのであります。

唯物的進化論者は、宇宙、生物、人類の進化は皆**自然法**に由るもので、決して神の創造でもなく其働きで進化を繼續したものではない、人類も猿類から進化したもので、神の特別創造といふ事を信じないと申します。ラマルクは**用不用**といふ事が生物進化の要因であると說きましたが、ダーウ井ンは**自然法**に由る者と假定して、適種**遺存**といふ事が其最大要因であるとしたのであります。

そこで進化といふ事に就て**有神的進化論者**の考へますのには、進化と云ふ事は**生命の成長**を意味するもので、生命の無い物質自體がどうして自發活動に依て進化するであらうかといふ事を疑つたのであります。即ち生命の無い物がどうして自然法によつて進化して、生命のある物になつたか、其原始の生物がどうして植物になり、又動物となり、猿類がどうして人類になつたかといふ事に就て唯物的

進化論者に問ふたのであります。彼等は此點には其説明に大なる困難を感じまして、それは偶然にさうなつたといふのであります。偶然とは實によい遁辭でありますが、實際この説明は滿足する事が出來ないで、ヘッケルも生命の無い物から生命の有る物は生れないといふ事を認めたのであります。蓋し進化には内部から外部に發展する前に、外部から内部に向つて絶えず或力が注がれないならば、進化といふ事は起らないのであります。星雲が太陽系の大遊星を作つたのも、無生物から原始の生物が出來たのも、其原始生物から植物に進むにも、動物に化するにも、猿類が人類にまで進化するにも、**一の新しい力**が之に加つて自然法をして其妙用をなさしめたのであります。そしてこの力は矢張り宇宙萬有を創造し之を維持し支配せらるゝ神より來つたもので、神なくしては宇宙は存在する事もなく、又進化するものでもないのであります。偶然に自然法の秩序が破壞

せられて、一大變化を生じたといふ事は、必らずや其背後に或る大なる生命力の存在を暗示するのであります。

一般學者の説によりますれば人類に一番近い猿類といふのは大猩猩(ゴリラ)や猩々(オラシウトン即ち森の人)で、黑猩々(チンパンヂー)や長臂猿類(ギッボシ)は是に次ぐと申します。そして是は初生物から一は植物性となり一は動物性となり、原生動物(單生殖細胞)から複生殖細胞動物となり、脊推動物、有腦動物、哺乳類、單子宮動物、首長動物、類人猿、無尾猿類となり遂に人類となつたといふのであります。それからこの無尾猿類が人類及び他の四種の猿類に分れたと想像しますが、實際ゴリラやオランゲと人類とを比較しますと、其形體に於ては相類似して居りますが、彼等との間には渡る事の出來ない大きな溝渠があると申します。此大きな距離(心理性の實在)は何によつて出來たのでありませうか、唯物的進化論者は説明をしません

が、英國の學者ミヴァート（一八二七生一九〇〇死）は『人の靈魂は造物者の直接な創造的働きに由て出來たものであらう。即ち人間の體として準備された一種の猿類の體に道理を辨別する靈管を加へられて、始めて人間が出來たのである』と主張いたしました。（人類進化論三八二頁）聖書に『ヤウエ神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に噓入れ給へり、人即ち生靈となりぬ』（創世記二章七）とありますが、土の塵とは物質の事を云ひ、生氣を噓入れられたとは之に靈質を賦與へられた事を云ふのであります。故に人類が進化の道程に於て猿類と同じ形體にあつたと云ふ事は信せられますが、人類が萬物の靈長たる所以は之に靈魂が創造せられて加へられたといふ處にあるので、是は確かに信ずる事の出來る事實であります。それですから近代の進歩した科學思想と基督教とは衝突しないのであつて、科學は基督教に研究の方法を敎へ、基督敎は科學に研究の精神を與へるものと云ふ事が出來ます。

それから人は其形體から云へば進化の絶頂に達して居りますが、今一段靈的に進化せねば完全な人となる事が出來ません。そこで神は茲に新たに眞人の模型として耶蘇基督を降し給ひ、人類をして更に神にまで上進せしめんとして、この耶蘇基督から靈力の入蓄を受けしめんとせらるゝのであります。米國カリフォルニヤ大學の敎授レ、コント（一八二三生一八九一死）は進化論上から之を說いて居ります。（人類進化論四九二頁）

唯物的進化論者に從つて人類は猿類と其祖先を同じくするから、別に尊いものでないと申します。ならば、人とは如何に卑賤いものであるかといつて、其忠義心も愛國心も大に動搖するに相違ありません。けれども人は神の子である、其祖先は神であると敎へますならば、其系圖の立派な由緒正しい事を思ふて、其の價値と尊嚴とを悟り、大に自覺自重して其動物的生活から一變して、眞に人間らしい生活に入るに相違ありますまい。唯物的進化論者は人を猿にまで引

下げるに對して、基督教は人を神の子にまで引上げるのであります。

最後に考ふべき問題は今回の歐洲大戰亂のことでありまして、是は唯物的進化論の當然の歸着とでも申すべきでありませう。即ちダーウヰンの適者遺存説に基いて、伊國の政治家マキアベリーの國家至上説となり、更に獨逸の哲學者ニーチエやトライチュケなども贊成して、帝國主義はやがて軍國主義となりまして獣力を崇拜し、官僚主義を發揮して人民の權利自由を束縛して、帝王の權力を無限に延長せんとした計劃であります。故に獨墺國に對して英佛露其他の國々が、自由の爲に大に戰ふに至つたのであります。是は明かに基督教主義に反して居るもので、戰爭の罪惡と悲慘とを感ずるものは、必ずや基督に依れる永久の平和を願ふのであります。

二、社會主義と基督教

社會主義といふ語は、西暦一八三五年英國で初めて使はれたもの

で、個人主義とは正反對の意味で用ひられて、人類を統一された全體として考へるのであります。個人主義の目的は或る個人の便利即ち富や地位や名譽等を獲るにあるのでありまして、先づ個人の特別な必要を滿たし其利益を追求むるのが第一で、それから漸次に公共の幸福に達しやうと欲ふのであります。社會主義は之に反して、人人をして其能力を充分に發揮しめ得る社會制度を組織して、土地や資本を公同に所有し、生産事業を共同に支配し、富を平均に分配して、誰も皆勞働する樣にしようと考へるのでありまして、極端になりますると政府の存在を認めないのであります。個人主義は自己を中心として自分の利益といふ事を先にしますので、從つて人類が互に爭ひ鬪ひ、分離する樣になりますから、社會主義はそれを救はんとしたのでありませうが、これは個人主義よりも更に危險な思想で、社會の階級といふものを無視し、國家の秩序といふものを破壞し、

政府を廢止する革命的のものであります。これ所謂虛無主義、共產主義といふものでありまして、これらは明かに叛逆の精神であつて、惡魔的精神であります。そして個人主義者も社會主義者も共に其根柢となつて居るのは、唯物思想であります。故に社會主義者が何よりも厭ひ嫌ふのは基督教でありまして、其實行の妨害者は基督教でありまする故に、先づ第一に敵視して攻擊します。彼の秋水幸德傳次郎が其死ぬる前に基督抹殺論を書きましたが、この精神から基督教に反對したのであります。

基督教は天の事を語るに社會主義は地の事を語り、基督教は靈の事を說くに社會主義は肉の事を說き、基督教は來世の事を論ずるに社會主義は現世の事を論じ、基督教は此世を聖化せんと欲し、社會主義は此世を破壞せんと欲します。故に到底一致するものではありません。

三、忠孝問題と基督教

明治二十六年の頃、文學博士井上哲次郎氏は宗教と教育との衝突てふ一文を草して、基督教の攻擊を致しました。要は我國の教育主義は明治二十三年御發布の教育勅語を以て基礎とせねばならぬし、教育勅語は國家主義であり、忠孝主義であるのに、基督教は世界主義であつて愛には差別はないと說くから國家主義と容れないし、君父の上に天父あり基督ありと說くから忠孝主義と反する、故に基督教と教育とは衝突するといふにあつたのであります。そして所謂忠君愛國の士を始めとして、博士學士、神道家も佛教徒も双手を擧げてこの說に贊成して、基督教退治に取懸つたのでありました。そして彼等は議論には勝つた樣に見えましたけれども、實際には敗北しました。それは三十年後の今日に於て、基督教が彼等の攻擊する樣なものでなく、却て我日本國民を救濟する唯一の活力であり生命で

あり、國家を擁護する堅城である事實が歴然と顯はれたからであります。そして其反對に彼等の汚行醜態は事實に於て、教育勅語に裏切をしたからであります。

然るに今尚ほ教育家や佛教徒や天理教徒などが、この古錆た問題を唯一の武器として、純朴な田舍人士の耳を喜ばしめて、それで基督教が撲滅されると思ふて居る事は、誠に氣の毒であります。けれどもこんなつまらぬ事の樣に見えても、案外に誤解して居るものがありますから、一應これらの問題を實驗上から少しばかり申上げて見たいと思ひます。

(一) 教育、道德、宗教との關係

教育とは英語の Education の譯語で、これは拉典語の Educare（育てる、教へるの義）から來り、その語源は同じ Educere（援き出す、導き進むるの意）から來て居ります。（麻生氏「家庭教育の原理と實際」六頁）即ち人の本性を援出して善良な者に育て教ふる事であり

ます。故に教育は人を人として發達さす事でありますが、是は所謂國民の生活に必要な知識技能を授けるといふ事のみでは、其目的を達するものではありません。人は道德的生物でありますから、人が人たるの道を教ふる事が第一であります。それでは倫理道德を教へて居るからそれでよいではないかと申しますが、人はさうしてはいかん、かうするがよいといふ事を教へたからとて、直に其の通りをするものではありません。善の善たるを知り惡の惡たるを知つたからとて、惡を避け善を行ふ人とはなれません。否大抵は其良心では之を識別しても其意志の力が弱いから、其撰擇を誤つて却て善を爲す事よりも、惡を爲す方に傾き易いのであります。『余は善を見且つ讃す、されど余は惡に從ふ』とは一羅馬詩人の語であります。我國でも中學校や女學校でも倫理道德を教へますが、實績が擧らないと云ふて、校長始め教師達が困つて居ります。曾て京都帝國大學の學生

風紀問題が世間でやかましくなつた時に、學生監山本良吉氏の談が大阪毎日新聞の京都滋賀附錄に載せてありましたが、其中に大學生の風紀を案ずるのは、學生が一時休學して都合上、中等學校の教師をして居る時に、その教師達の仲間の感化を受けて其品性を破壞す事が多く、それらが歸校して來ると惡い種を蒔くとの事でありました。是を見ますと教育家自身が道德の實行者でない事も幾分推測が出來ます。そして高等學府を出た人達の品性が善良で申分が無いかと申しますれば、實際には隨分非難が多いやうであります。故に道德は今日の教育によつて充分に維持されない事を知るのであります。

『人に道德を教へるならば道德を行ふことを得させる事が出來るといふ確信を完全に持つて居た人は、世界の教師中にソクラテスより外に一人もありますまい。德行は教へ得べしとは彼の有名な標語でありまして、この基礎に立つて三十年間彼は雅典の街道や仕事場を

廻り歩き、特愛の道德問題を例を以て示しつゝ、常に道德的教訓を人々に與へて彼等を有德ならしめんと力めました。けれどもこのソクラテスの凡ての努力から道德的改善が少しなりとも起つたといふ證據を我等は持ちません、彼に最も親密で且つ最も彼を敬服して居つた弟子であり友人の一人であるアルキビアデスは、ソクラテスの改善的勢力を充分に受けた譯でありますが、放縱邪行の人として終りました。道德の宣傳は他の勢力を伴はないでは社會に深く透入した事なく人間の思想、行爲の中に廣く流れた事はありません。德行の爲には知識以外の或物が必要であり、人生の爲めには知的開明以外の或物を要します』とは故米國アマスト大學總理シーリー先生の意見であります。（「眞理と生命」十二、十三頁）

教育勅語は我國民道德の大本を示すもので、誠に結構でありますが、三十年來この道德律によつて養はれた國民教育を見る時は、未

だ充分に其功果を收め得たとは云はれません、此勅語の精神をして國民の心に徹底せしむるには先づ宗教の素地を造り強き信念の上に之を敎へねばなりません。

宗敎は信仰の事で道德は行爲の事でありますが、之は實際別々になるべきものでなく、一つにならねばなりません。宗敎は道德の原動力でありまして、道德によつて其宗敎の眞價を維持する事が出來ます。道德の伴はない宗敎は國民救濟の力に缺けますし、宗敎の力の伴はない道德は唯形骸のみであつて生命がありません。眞正の敎育は宗敎に依らねばならないのでありまして、**基督敎は人を人として敎育する力に充滿した宗敎であります。**故に敎育勅語は基督敎の力に依つて其國民の道德を振興さしめ得るいで、決して宗敎と敎育とは衝突するものではありません。

(二) 祖先崇拜と基督敎

祖先崇拜は羅馬人や支那人の如く、家族制度の發達した國では特に盛であります。これは元來は宗敎でなくて人情自然の美はしい發露でありましたが、時を經るに從つて遂に宗敎と變化したのであります。英國の哲學者スペンサーはこの祖先崇拜は、宗敎の起源であるとまで論じて居りますやうに（學者の反對はありますが）、世界の人類には共通な思想であると見えます。

茲に或る家に一人が死去ますと、野邊の送りをして之に墓標を建てますが、何か物足りない心地が致しますし、其愛情の絆は其死者が生前に存在したと同じ樣に感ぜしめ、之を慕ふて其寂寞の情を慰めるのであります。そして其死者の靈魂が今我等を離れて寂寞い野原で道に迷うては居ないであらうかなどゝ考へて、之を慰むる爲に其人の生前に好んだ物や、愛玩した物などを之に供へたり、又命日には家族親戚故舊などを集めて其前で筵を設けて其死者を記念追

懷し、生前之に盡す事の足らなかつた事や、其恩愛などを想出して涙に暮れます。それが其家に重大な關係の有る人であるとか、國家社會に功勞でもあるとか、英雄豪傑として世人に記憶せらるゝとかしますと、特別に其功業や盛德を追慕稱讃し、詩となり歌となり文章となつて現はれて來ます。家族主義の盛な處では家柄を重んじますからして、自分の先祖に斯な偉人が輩出た事を誇りとし、遂には其人が何か特別の力を有つて居るかの如くに信ぜられ、時代を經るに從つて其感が強くなり、人間以上の一種の不思議な力でも有つて居る神の如に思はれて、一家一族の守護神として祀り、出產婚姻其他一家の重大事は其靈に告げ、又之に一家の幸福を祈つて子孫繁昌家運長久を願ふ樣になつたのであります。始めは家庭の宗教で即ち氏神であつたものが、後には其土地の守護神となり、國家鎭護の神と崇められる樣になつたのであります。支那では皇帝自ら其祖先を

祀り之に犧牲を獻げ、四季並に帝王踐祚の際などには盛大な儀禮を以て之に事へたものであります。然し同じく家族制度の盛んな血統や家柄を重ずる猶太人は、其先祖が信じた神を崇拜したもので所謂祖神崇拜でありますが、先祖其者を直に神視したのとは非常に其趣を異にし、信仰の根柢に相違があります。

我國では神道家や倫理學者などは、古代から祖先崇拜があつた樣に申しますが、太古の日本人の敎俗は印度地方のそれに似て天然崇拜が盛んでありまして、其祖先を尊んだこともは認める事は出來ますけれども、實は支那文物輸入の影響を受けて少なからず變化した樣に思はれるのであります。太古は宗敎と政治と一致して居まして、天御中主神が主權者であつて、高御座靈神は巫長即ち祭司長として宗教を司つて之を補けられた樣であります。（久米博士著「日本古代史」及び「日本古代史と神道との關係」參照）文學博士久米邦武氏は祖神崇拜であつたと申されます。そして日本

の神道は神社神道と宗派神道の二種に分れて、政府は神社を宗教と認めず、我皇室の先祖や歴代皇帝及び皇族、又皇室と特別關係ある初代の偉勳者、或は功臣忠士を祀り、天然崇拜も之に加つて居りますが、宗派神道は十三派あつて之を宗教として待遇して居ります。政府は神社を宗教と區別して一般人民に崇敬を強いんとしますが、神道家及び人民の多數は之を宗教、殊に國家教と認めて居るのであります。

基督教は唯一神教の立場にありますから、多神教的に人物を神として崇拜する宗教には、大に反對するのであります。我等の祖先を尊敬して其靈を慰めること、之を記念する事、其墓所を叮嚀に保存する事、其系圖や家柄を尊重する事などは、基督教信仰と別に衝突しませんが、其の人間或は人間以下の自然物を神として祀り、之に我が運命を托し之に祈るといふ宗教的行事をする事は、其良心の許

さない處で、同意する事は出來ません。死者に倫理的に敬意を表する事と、宗教的に崇拜を捧ぐる事との間には大なる相違があります。

又實際問題から考へますと、不品行をしたり、法律を犯す罪人となつたり、品性を墮落さす不道德の行爲をする者は、祖先の名を恥かしむる者であります。眞實祖先を尊敬しますならば自己を清潔に保つ事が必要でありまして、基督教徒は形式よりも實際を尊んで、自身が生ける祖先の肉碑であると思ふて自己の生涯を正しくするのであります。そして人の祖先の祖先なる神、諸王の王なる神を信ずるは當然の事ではありますまいか。祖先崇拜問題は我等の良心に於て決する問題だと思ひます。

(三) 基督教は孝道を尊重す

舊約聖書の内に『モーセの十誡』といふのがありますが、其第五誡を見ますと、

汝の父母を敬へ、是は汝の神ヤウエの汝に賜ふ所の地に汝の生命の長からん爲なり。（出埃及記廿章十二節申命記五章十六節）

とありまして、猶太人は之を神よりの誡律として尊重し、之に服從したのでありますが、主イエスの時代には之が一片の形式として用ひられ、其孝道の精神が衰へて居たから、主イエスは深く之を慨いて、當時の學者や宗教家に對して、

それ神誡めて爾の父母を敬へ又父母を詈る者は殺さるべしと宣給へり、然るに爾曹は曰て凡て人父母に對ひ爾を養ふ可ものは禮物なりと云はゝ、其父母を敬はずとも可とす、斯くて爾曹遺傳により神の誡を廢くせり。（馬太傳十五章四―六節）

とて痛く之を攻擊せられました。又富る青年が永生の要道を問ふた時にも、神の誡を守るべき事を說て、

殺す勿れ姦淫する勿れ盜む勿れ妄りの證を立る勿れ爾の父と母を

敬へ、又己の如く爾の隣を愛すべし（馬太傳十九章十六―廿二節）。

と敎へられた事もあります。それのみならず御自身に於て之を言ふばかりでなく實行せられました。即ち天父に全き孝道を竭し、地上の義父ヨセフの生存中を始め、生母マリアに對しても三十餘年間孝養を盡され、其十字架上正に死別の時に於ては、

婦よ此れ爾の子なり、此れ爾の母なり。（約翰傳十九章廿六、廿七節）

といつて、母には自分の代りに愛する弟子ヨハネに賴るべき事を望み、ヨハネには自分の母としてイエスに代りて孝養を盡すべき事を遺言せられたのでありました。期る際にも其生母に對する眞情が流露して居るのを見まして、主イエスは孝道を重ぜられなかつたといふ事は出來ないと思ひます。

又使徒保羅は家庭の道德を說いて申しますには、下の者が上の者に事へるばかりでなく、上の者も下の者を愛せよといふのが主意で

ありました。即ち

妻なる者よ其夫に從ふべし此は主に在る者の爲すべき事なり、夫なる者よ其妻を愛すべし苦を以て待ふ勿れ、子たる者よ爾曹すべての事二親に從ふべし是主の悅び給ふ所なり、父なる者よ爾曹の子を怒らする勿れ恐くは其氣餒ん、僕なる者よ凡の事肉體に屬る主人に從ふべし人を悅ばする者の如くたゞ眼前の事を務むる事なく誠心を以て神を畏れて從へ、爾曹何事も人に事ふるが如くせず主に事ふる如く心より之を行ふべし、そは爾曹は主より報賞なる嗣業を受くる事を知る者なれば也、爾曹主なる基督に事ふべし、不義を行ふ者は亦その不義の報を受く、主は偏視たまふ事なし、主人なる者よ爾曹も亦天に主ある事を知れば義に從ひ公平を以て其僕を待ふべし。（哥羅西書三章十八節—四章一節）

とありまして、此外以弗所書六章一節—五節、提摩太前書五章一節

—八節、提多書二章一節—六節等にも同じ主意を以て敎へられてあります。是は實に支那道德の如く唯長上に事ふる道のみを敎へて、其下を愛し勞る道を敎へないのとは雲泥の差であります。然し世人が基督敎に對して、親不孝を敎へ家族制度を破壞するものであると攻擊するのは、即ち

それ我が來るは人を其父に背かせ女を其母に背かせ媳を其姑に背かせんが爲なり。（馬太傳十章卅五節）

凡そ我に來りて其父母妻子兄弟姉妹また己の生命をも憎む者に非ざれば我弟子となる事を得ず。（路加傳十四章二十六節）

との主イエスの御言葉に對してゞあります。然しこの言葉は眞理の如何なる者であるかを知り、信仰の實驗を經た者にとつては別に問題にもなりませんが、かう云ふ經驗の無い人がたゞ是等の言葉のみを聽いたならば、斯く感ずるのも無理からぬ事であります。是の言

葉は主**イエス**御自身が至高の神と同一の權威を有ち給ふといふ自意識からと、又神に從つて其弟子としての生涯を送らんとする者に對する大なる要求と警告とであります。この憎むといふ事は情實の羈絆を斷つ事を意味するのでありまして、最も正しい眼を以て彼等の利害を看る事なのであります。即ち彼等の現世の慾望が滿足される事を希はないで、彼等に關する神の聖意が成就せんことを欲する精神を云ふのであります。何も紊りに父母兄弟姉妹姑嫂との間を分離して爭はしめよと云ふ事ではありません。世の中には自分達の利慾や願望を達せん爲には、隨分互に相爭ふて居るではありませんか。主**イエス**は斯る意味を以て述べられたのではなくして、**神を信ずるは人間第一の義務**であつてこの眞理を發見して、これに從ふとするには義理や人情や私慾の束縛を離れて、自己の野心を殺して即ち其肉と情とを十字架に釘けよ、さすれば眞に我が弟子として神に事へ、

又眞實に其家庭を生かす事が出來るといふ事を敎へられたものであります。**宗敎の目的は神を識るに在り**ますが、此信仰を得る爲に其眼が妨害とならばそれを拔出して棄てる、兩手兩足が妨害とならばそれを斷り去るといふのが、其本領であります（馬太傳十八章八、九）、この熱誠が我心裡にあつて先づ第一の義務を果し、神との關係を正しうしますれば、それから親に對し、家族に對し、君に對し、國に對し、人に對する義務も凡て之を盡し得るに至ります。人は神の力を俟たねば義務を行ふのには非常に困難を感ずるものでありまして、義務は敎へられて果す事は出來ません、神の靈感に觸れて人以上の生命が我裡に充ちて、始めて茲に人としての義務を盡す事が出來ます。故に使徒保羅は敎へて申しました。

知識は人を驕らしむ、然ど愛は德を建るものなり。（哥林多前書八章一節）と、基督者は其信仰の最初に靈と肉との大苦闘を經驗します。即ち父母

兄弟親戚朋友などから大反對を受けます。これは非常につらい事であります。けれども萬難を排して生命を的にして先づ神の敎に從ひまして、そして神の靈力を受けて其愛の泉より來る生命の水に導かれて、其家のため君の爲め國のため人のために盡す者となります。眞正の忠孝はこの苦き杯を飲まねば生れて來ません。

(四) 基督敎は忠君愛國心を聖別す

主イエスの時代には、猶太國は羅馬政府の屬國となつて居ました から、彼等は納稅の義務を荷はしめられて居ましたので、猶太人は其先祖傳來の愛國心によつて之を善からぬ事に思つて居ましたが、主イエスの名聲高くなり民衆之に從ふを見て、其當時の宗敎家等は其好まない羅馬政府の方伯ヘロデ王の黨派の人と共に相謀つて、一の難問即ち此納稅問題を提出して之を試みました。これは若し納稅を可とすれば猶太の愛國者はイエスに離反し、若し不可とすればヘ

ロデ王黨は之を以て不忠であるとして訴へんとしたのであります。そこで主イエスは通貨一個を出さしめて其像は誰であるかを問ひ、羅馬皇帝の肖像であると答へたので。

カイザル(皇帝)の物はカイザルに歸し、神の物は神に歸すべし。(馬太傳廿二章廿一節)

といふ名高い答を發せられました。是は地上の王者に服從する事は人としての義務であるから、屬國であつても其納稅の事を怠つてはならぬ事と、それと同時に人は心靈の父なる神に事ふるといふ事は最大の義務であるから、其信仰の道に背いてはならぬ事を明瞭に敎へられたものでありまして、是は實に天下萬人の遵守すべき人間の通則であります。そして主イエスは御自身猶太人の血を受けて生れ給ひしが故に、彼等同樣に熱烈な愛國心を有つて居られまして、幾度か其國人の爲に泣かれました。

噫、エルサレムよエルサレムよ豫言者を殺し爾に遣されし者を石にて擊る者よ、母鷄の雛を翼の下に集むる如く我なんぢの赤子を集んと爲しこと幾回ぞや、爾曹は欲ず、視よ爾曹の家は墟と爲て遺さるべし、誠に我爾曹に告ん主の名に託て來る者は福なりと爾曹いはん時至る迄は我を見ざるべし。（路加傳十三章三十四—三十五節）

とは其正に滅びんとする猶太國の前途を想ふての、衷情の絶叫でありました。然し主**イエス**の大理想は其時代の猶太人の希望と反して、地上の王國建設ではなくして、心靈**上の王國**建設にあつたのでありますから、政治的獨立を計り給ひませんでしたけれども、心靈的獨立を其民に供せん爲に、彼の生命を其民の爲に獻げられたのであります。これ僞れる愛國者の爲し能はざる處であります。

當時羅馬の暴帝ニロの治下に在つて使徒等は基督教宣傳に從つて居りましたが、其際使徒彼得は、

爾曹主の爲に凡て人の立る所の者に服へ、或は上にある王或は惡を行ふ者を罰し善を行ふ者を賞むる爲に王より遣されたる方伯に服ふべし……衆の人を敬ひ兄弟を愛し、神を畏れ王を尊ぶべし（彼得前書二章十三—十七節）

と其信徒に敎へました。又使徒保羅は、

上に在りて權を掌る者に凡て人々服ふべし、そは神より出でざる權なく凡そ有てる處の權は神の立て給ふ處なればなり、是故に權に悖ふ者は神の定に逆くなり、逆く者は自ら其審判を受くべし（羅馬書十三章一、二節）

われ殊に勸む萬人の爲に籲告、祈禱、懇求、感謝せよ、王及び凡て權威を有つものゝ爲には別けて之を行べし、これ神の意旨に適ふ事なり。（提摩太前書二章一—三節）

と敎へて居るのを見ましても、決して君王に對して不忠なれ反逆を

計れよと教へて居ない事は明白であります。そして事實に於て常に基督教徒は其主權者に對して、柔順忠良な人民であるのであります。昔し英國のジョン、バンヤンは國家に從ふに二つの方法があるとし、一は良心に從つて其命令の如くに行ふ事で、又一つは萬一法令が不義であるならば、之を奉せずに柔和く政府の處分を受けるのであると申しました。

そして使徒保羅は彼れが猶太人であつた故に諸國に散在して居る、其同胞猶太人の狀態を見ては、靈的救濟の熱情止み難くして其衷情を述べて曰く、

若し我兄弟我骨肉の爲にならんには、或は基督より絶れ沈淪に至らんも亦我願なり。（羅馬書九章十三節）

兄弟よ我心に願ふ所と神に祈る所は、イスラエル（猶太人）の救はれこと也。（羅馬書十章一節）

と、是を見ましても、心に基督を宿して其恩寵を味はつたものは、如何に愛民愛國の至情が燃えて、之が聖別せられて居るかを見る事が出來ます。

蓋し愛國心にも眞正のものと虚僞のものとがあります。名譽利達を目的とする愛國心は縱令身を君國の爲に殺しましても、其れは虚僞の愛國心であります。これは私慾を國家の上に移した一種の自己中心主義で、決して高貴なものではありません。眞正の愛國心は自己といふ觀念は全く含まれて居ないもので、己れ如何なる罪名を蒙りて死ますとも、猶ほ國家を想ふて國の爲に盡さんとするのであります。自ら愛國者を氣取る者は博士ジョンソンの申しましたやうに、

『愛國てふものゝ背後に隱るゝ奸人』であります。誰か我日本國に生れ來て日本國を愛せないものがありませう乎。誰か日本臣民と生れ來て日本の皇室に不忠な者がありませう乎。然し形式的に愛する

のと實意的に愛するのと、演劇的に忠なるのと、實行的に忠なるのとの別があるのみであります。眞正の忠君愛國心は、目を國家以上の者に注ぐによりて生ずるものでありまして、君父の命とならば何事でも從はんと欲する支那的の忠孝は甚だ不實な忠孝であります。馬を以て鹿と云ふ忠君家は支那では必要であるかも知れませんが、我國では不必要であります。印度人は宗教心に熱烈でありますが愛國心に乏しく、支那人は愛國心は熱烈であるかも知れませんが宗教心に缺けて居りますから、共に其國家を獨立國として救ふの力に乏しくあります。基督教は我等に高貴なる宗教心と愛國心とを供して、我國を地上の理想の王國となさしめんとするものであります。

曾て大審院長たりし故三好退藏氏が獨逸留學中の時の事でありますが、次の話を聞いて大に感じて其信仰を起されて、基督者となられたさうであります。それは即ち

普魯西亞のフレデリッキ大王が曾て宴會を催されました時に、時の名將チヰヂンが遲刻致しましたので、大王は何故遲くなつたかと問はれましたから、チヰヂンは『聖餐式に列した爲であります』と答へました。處が大王の曰はるゝには『基督の血は甘かつたか』と、そこでチヰヂン大層憤怒して其席を立つて王に向つて申しますには、『臣が多年陛下の爲に犬馬の勞を厭はなかつた所以は、陛下が神を敬はれるが故であります、然るに今や陛下は漫りに神を瀆すことを申されますから、臣が陛下に忠義を盡すも是までゝありません』といつて辭し去らうとしましたので、一座は之が爲に白け渡つたのであります。そこで大王は之を引留めて暫く默考せられた後に、之を謝して『朕の言は只戯語であつた、朕が今日あるは固より卿等の忠勇に由ると共に、又神の佑助に由るのである、何して神を蔑ろにして濟まうか』と申されましたから、チヰヂン

も其怒を和げて君臣再び相和して談笑の裡に其宴を終られた。

といふ事であります。實に美談ではありませんか。（福音新報第六八七號）

（五）我國體と基督教

倩ら我國體に關して國史の敎ゆる所に從ひ、我等の信仰の立場によつて案ずるに、全知全能の神が我等の棲息する地球を創造し、人類を之に棲息せしめられましてから、漸次其子孫が蕃殖して世界の各地に分派したのであります。そして我國土に來りし日本の原人は南北二種ありまして、北種は千島樺太から進入したもので食唇人（コロボックル）を其一とします。それから越人（高志）熟蝦夷龝蝦夷又は國栖佐伯土蜘等の類が來たのであります。南種は筑紫中國から進入したものでアイヌ人を始めとして馬來半島地方から來たものが多く、四五千年前に北よりは南進し、南よりは北進して、一時南方のアイヌ人種は優勢であつて全盛時代もあつた樣でありますが、彼等は人

類全體の進歩に貢献する事が少く、其天職を遂行するに缺くる處があつたから、更に强大で有力なる天孫人種即ち大和民族が南方から出現して、此國土經營の大任に該つたのであります。國史は國常立尊に始まりまして、之が我皇統の元祖でありますが、國常立尊は即ち天御中主神の事で高天原朝廷の主權者でありました。高天原の所在は史家によれば外國ならんと云ふものもありますが、久米博士は日本國を指したものでこの良土を中心として、日韓閩の三國を支配したのであるとの事であります。そして其補佐者として高御産靈神は宗教を司り、神皇産靈神は武を司り、この兩者の裔は中臣齋部大伴久米等文武の伴部を總管した相將の貴族に分れたのであります。これ國民の最高の品種でありましたから「加美」即ち上の人として尊び、其子孫を「ミコト」と呼び、男を彦といひ女を媛といひました。日子日女の義であります。其後伊勢の高天原朝廷には英主伊弉諾尊立たれ

ましたが、更に出雲に朝廷を置かれたる伊奘冉尊は、舟に乘りて磯馭盧島即ち今の淡路島(傳説には沼島、繪島、幡多の三ヶ所あり)に來りて互に國土經營の方略を定められ、茲に大八洲國の秩序が立つたのであります。次で大日靈貴尊(天照大神、伊勢太廟に祀らる)は伊勢朝廷に君臨せられ、月夜見尊は常世國即ち支那の閩地方を治められ、素盞嗚尊は朝鮮新羅を治められ後に出雲に來りて清(須賀)に都せられました。(新羅曾尸茂梨の地は今の江原道春川府牛頭州ならんと云ひ、京都の八坂神社(祇園社)はこの尊を祀れるものと云ふ)。天照大神の子忍穗耳尊は西國征服に赴かれ其子瓊瓊杵尊は三種の神器を携へて、日向高千穗峯に都せられ後吾田國笠狹岬(薩摩加世田港)に都を遷されました。素盞嗚尊の子大己貴命は出雲にありて武勇を以て其地方を平定せられ、大國主命と呼ばれましたが、其子事代主命の時に、高天原朝廷よりの使者武甕雷命と會見して、其功を高天原朝廷に讓り

大倭に隱棲せられましたが、これが大三輪家であります。高天原朝廷は更に高千穗に歸られましたが瓊瓊杵尊の孫に至り、五瀨尊及び皇弟磐余彥尊は中國平定に向はれ、海路浪速を經て日下蓼津(生駒山の孔舍衞坂)に着かれましたが、此時大倭登美(城上郡)の君長に長髓彥ありて、瓊瓊杵尊の皇兄饒速日命の來られし時其女三炊屋姬を與へて之と結び、勢力强大でありましたので、此處に於て之を迎へ戰ひました。五瀨尊は流矢に中りて薨せられたので、磐余彥尊は更に熊野に迂廻して吉野より進み、其地方の豪族を征服して遂に長髓彥と接戰せられましたが、饒速日命は彼を殺して歸順せられたので大倭は平定しました。依て磐余の地畝傍山の西南橿原の邑に皇居を奠め、天皇の位に即かれ中國の主權者たる事を明かにせられ、政府を組織して大に皇基を振起せしめられ、又鳥見山に靈時を立てゝ天神即ち皇祖を祀り、又五穀豐穰の神をも祀られました。やがて大三輪家か

ら事代主命の女五十鈴媛命を納れて之と婚を結び給ひて、出雲との關係を密にし建國創業の大任を完うせらるゝに至りました。これより皇統連綿として百廿三代に及び、二千五百有餘年の光榮ある歴史を有するに至りました。そして皇室を中心として大和民族は父子の如くに團結は至て強固であつたのであります。（久米博士著「日本古代史講義」及び「日本古代史と神道の關係」參考）

故に我等は此豐葦原瑞穗國と讃へられた我日本國を以て、大和民族興起の地と定め給ひ、之に萬世一系の皇統を與へられ、君臣相和して父子の如くにして今日に至らしめ給ひし全知全能の神に、深く其恩惠を感謝すると共に、益々至誠以て世界の理想國となさんとする事は我等の使命であると信ずるのであります。

我國民は古來至誠の心がありまして、この誠實が發して君に向へば忠となり親に向へば孝となつたので、これは大和魂の精髓であります。そして是を體現したのが武士道でありますが、現今の武士道

中自殺と復仇と瘠我慢の三思想を取除き、其犧牲心、廉耻心、剛勇心、仁俠心を聖別して基督教の愛の精神を入れますと、是によつて我日本國民の使命を完うし得ると思ひます。今や世界の列强と共に地球の表面に聯立たねばなりませぬから、どうしても、世界的精神、人類的觀念を吸收して、大國民たる要素を養はねばなりませぬ。英國民が世界の表面到る處に殖民して、大國民を形成りました樣に、我日本人も大に世界を其住所として世界の人と交り、世界的に發展して世界的日本帝國とならねばなりませぬ。又我等の大に憂ふる所謂日米問題も、彼地の我國人がこの思想信仰によつたならば、無事に解決する事と思はるゝのであります。故に世界共通の宗教思想と信仰とによつて導かるゝ事は、我國體を永久に安泰强固ならしむるの道であると信ずるのであります。

第五章　神に關する思想

(一)　新宗教樹立運動

近代の所謂智者學者と云はるゝ階級の人達は、國民の道德が日々に墮落し腐敗し行くのを見、教育の力も亦以て之を救ふに足らぬ事を感じ、在來の神道、儒教、佛教も今や其權威を失つて、國民の靈的生命の鼓吹者とならぬ事を思ひ、さらばといつて基督教に頼るのは感情上面白くないとあつて、既成宗教では駄目であるから、我日本に適合する新宗教を製作し、是によつて國民の道德的破産を救ひ、宗教的空乏を滿たしたいとの考へから一種の新運動となつた樣であります。基督教を首とし儒教を胴とし佛教を手とし神道を足として、それで世界的宗教が出來たならば誠に結構でありますが、さて誰がこの新宗教に活力を入れるのでありませうか、新生命を何處から注

入しますか。宗教は人の手で作られた小兒の玩具とは違ひますから、歸一の大道は耶蘇基督に於てある事を知るのが肝要であります。

(二)　不可識論

人間の知識を目に見ゆる現象界のみに限つて、現象の後に横はる實體、即ち神とか靈魂とか云ふ樣な目に見えない事は、到底人間の智慧では知り得ないといふのが不可識論で、ハックスレーやスペンサーなどが唱へたもので、今日でもこの思想に醉ふて居る者も澤山あります。是はカントの物自身は知る事が出來ないと云ふ思想から出たのでありますけれども、人間の理性のみでは宇宙の眞理は悉く解釋されるものではありません。科學が假定に歩を發して研究の途に進むのも、これ即ち一個の信仰に基くのであります。人は信仰に依て見えない世界を望み、實驗によつて靈界の神秘に觸れて之を確認するのであります。人智の達し得ない世界に、信仰は之を導き入

るゝのであります。

(三) 自然神教(超絶神教)

神の存在と其神によつて此宇宙が造られたものである事を信じますが、然し神の造り給ふた宇宙は完全なものであるから、神は之に干渉する必要はない、宇宙は丁度大きな機械師によつて造られた機械の様なもので、神の手を離れて自分の力で動いて運轉するものであると云ふのであります。神は造物者ではあるけれども其保護者でもなければ維持者でもない、宇宙は神を離れて天然の法則に從つて進んで行き、人は理性即ち道理に依て歩むもので、理性以外に天啓即ち神の默示と云ふものは要らないと云ふのであります。これは神は宇宙に超然たる者であるといふ信仰でありまして、ヘルバルト、チンダル、レッシング、ヴォルテール、ルーソーなどは此思想に從つたのであります。この信仰は一の反動から起つたものであります

が、結局は無神論と同じ事でありまして、無慈悲な神、人間の祈願を聽かない神、人間と何等の關係の無い神は、たとひ存在しましても人間には不必要であつて、人類の崇拜すべき神でない事は明白であります。

(四) 萬有神教(汎神教)

神をこの宇宙の外部に存在するのみであると見たのが自然神教でありますが、其反對に神を宇宙の内部に存在するのみであると見たのが、即ち萬有神教なのであります。神は靈魂であつて、宇宙は其身體であります。宇宙は神と同體でありますから、神を離れては寸時も存在する事は出來ないと信じます。そして神は太陽や星や地球や蟲や鳥や花や其他の動物や人に現はれて居ると信じ、宇宙即ち神、神即ち宇宙で、宇宙と神とは一身同體であると信ずるのであります。印度の吠陀教、佛教、天理教、ストア派、スピノーザ、タゴール等

は此の立場の信仰に在ります。

萬有神教は自然神教に比較しますと遙かに優つて居る處があり、多くの眞理を藏して居りますので、多くの人の心を引寄せて其信者としまする。その上に科學とも衝突しませんから、多くの人の理性と感情とを滿足させるのであります。けれどもよく考へて見ますと結局は無神論に近いのであります。萬有神教は人と物とを區別する事も出來ず、神と人とを區別する事も出來ません。其上に善と惡との區別が無いのでありまして、人には自由の意志と云ふものが有ると認めませんから、たゞ自然法の運命に從つて決定せられ居るのみであつて、自分で善を爲す力もありませんが、惡を避ける力もなく、原因結果の法則即ち因緣に支配されまして、たゞ神がなさしめる事をするのみで人には何等の責任もなく、凡てを自然の運命と諦めて成る通りにしか成らないから仕方が無いといふ寂しい絕望の人となり

ります。その上に善人も惡人も同じ宿命の法則に支配されるのであります。道德法が嚴然として宇宙間に存在して居るといふ事も否定するのであります。そして人の靈魂は死後或は犬に或は鳥に或は花に輪廻して現はれると說きまして、個性の消滅を敎ふるものであります。この萬有神敎の慈悲は廣いは廣くありますが、善も惡も差別がありませんから、賴るに足らない神であります。詩人ブラウニングは、

地中の蟲も愛知らば、宇宙の中の愛の無い神よりも神的である。

と申しました如く、我等には聖き義しき愛の神にまで行かねばならぬと思ひます。

(五) 唯一神敎

唯一神敎は宇宙の外部に超越する神を信ずると同時に、宇宙の內部に內住する神を信ずるのであります。即ち宇宙は神の造り給ふた

ものでありますが、宇宙其物が神ではなく、この造物者なる神はまた宇宙の内部に在つて其進化を續けて之を保護し指導し維持して行かれる神であると信ずるのであります。即ち一の神でありますが其力の働きは外にも内にも現はれるので、萬物の造主であると共に其靈魂となつて之に生命を與へ、之を生長し發達せしめ給ふ神であります。そして人類はこの神の作り給ふたもので、愛を以て天然の法則に從つて攝理せられ、人類の父となり又其友となりて、常に恩惠を垂れ給ふのであります。神は永久の善でありまして、一時惡の存在を許し其活動に任せられますが、最後に審判し給ふて善と惡とを區別し、善人を永生に導き、惡人の靈魂は死せしめ給ふのであります。道德法は現世のみならず、來世にまでも渉るものであると敎へらるゝのであります。

基督敎はこの唯一神敎でありまして、宇宙の造物者なる神、攝理

と奇蹟とを以て人類を導かるゝ父なる神を信じます。そして其愛なる神が人類を救濟ん爲に受肉降生せられた子なる神としての耶蘇基督を信じ、其救濟を完成する爲に遣はし給ふた聖靈なる神を信じます。そこで或人はそれでは唯一神敎ではなくて三神敎ではないかと申しますが、是は多神敎とは違ふのでありまして、多神敎は各個別別の神を認めて居り、其神々の性格も目的も權威も各自異つて居り、又各自の民族の特有の神を信ずるのであります。基督敎はそれとは異つて三神が一體となつて唯一の目的を有ち、其目的の爲に互に心を合せて盡され、其權威も同じなのであります。即ち神は一つでありますが單獨ではないので、三つのペルソナ(意志と智性と能力と愛心とを備へられた實在者)として存在せられるのであります。然し三つの異つた神が在るのではありませんで、父、子、聖靈、各々神でありまして、そして神とは此三位の一致したる者であるといふ信仰

であります。この三位一體の神の信仰は宗教的眞理でありまして、數學的眞理、哲學的眞理、科學的眞理とは異ります。これは宗教的實驗によりて初めて知り得らるゝのであります。詩人テニソンは『決して證明せられない眞理がある』と申しましたが、この信仰も證明せられないけれども信じて明かに悟り得る眞理であります。

基督教は事實の宗教であつて、又實力の宗教であります。そしてこれは宗教と道德とを一にした天國の福音でありまして、人類救濟の唯一の能力であります。

そは神の國は言に在に非ず能に在れば也。（哥林多前書四章二十節）

それ十字架の教は沈淪者には愚かなる者、我儕救はるゝ者には神の能力たる也。（哥林多前書一章十八節）

我は福音を耻とせず、此福音は猶太人を始め希臘人凡て信ずる者を救はんとの神の大能たれば也。（羅馬書一章十六節）（本章「聖書之研究」「基督教問答」及二三の辭典に負ふ所多し）

第六章　人生と宗教

世の中には實業や經濟や政治や學問藝術の必要を認めない者はありませんが、宗教の必要を認めない者は澤山あります。曾て故福澤諭吉氏は、『宗教は愚民を導くには有用であり、婦女子や小兒やを教ふるには便利である、然し智者には必要はない、智者は宗教を省いても宜い』と申された事がありましたが、智者とは多分福澤氏自身の事を云はれたのでありませうが、果して智者には宗教は必要が無いでせうか。勿論世の中には多くの迷信がありまして、加持祈禱とか卜筮とか護符とか云ふものによつて家内安全、商賣繁昌、延命息災等の現世的幸福を得んと希ふものもありまして、之に嚴格な道德が伴はない宗教があります。こんなのは實際智者には必要はありますまいが、道德以上の宗教即ち道德の根源たる宗教、惡を避け善を

行ふ力の源たる宗教があります。是をしも不必要と云ふのでせうか。

今から凡そ二千三百年前、希臘の歴史家ヘロドタスは、『我は諸國を遊歴して、憲法や文學や政治の無い人民を見た事はあるが、未だ曾て宗教の無い人民を見た事が無い』と申しました。又彼の英雄傳の著者プルターク（西暦百十五年死）は、『世界を遍歴して見れば、城壁や劇場の無い都市もあらう、貨幣や藝術の無い都市もあらう、然し殿堂か祭壇か或は宗派の無い都市を見た人は未だ曾て無い』と申して居ります。そこで近代の人類學者や進化論者などが、世界の諸人種に就て種々取調べて見ました結果、アフリカの内地や南アメリカの南端の或種族や、印度セロイン島のヴエッタ族などには宗教らしい物が無い事を發見したといつて大層喜びましたが、是に依て觀ますれば一二の例外はあるとしまして、世界の人類は自ら宗教的である、宗教心は共通であると云ふ事を實證したのであります。勿論其信仰の

内容や形式は各自異つては居りませうが、神の存在と來世及び未來の裁判等に就て、何等かの信仰がある事は明白なのであります。

それ故に自分には宗教心が無いと思ふ人でも、心靜かに考へて見ますれば、何等かの信念が我意識の奥深く潛在で居る事を發見するでありませう。平生は其宗教心が眠つて居ても、何か人生の一大事に出逢ひますると、むく〳〵と其頭を擡げて來て、神に信頼り祈願し指導を請ひ其光明を求むるに至ります。俗に苦しい時の神頼みと申しますが、是は甚だ利己的な信仰でありますが、矢張り否定する事は出來ますまい。彼の日露戰役の際に奉天の大會戰が行はるゝ前に、時の總參謀長陸軍大將男爵兒玉源太郎氏は、もはや人力では到底この大戰爭には勝てないと思つて、夜私かに人靜つた時に陣營を出でゝ野原に於て、人知れず天地の神に其の佑助を祈られたといふ事であります。或は日本海の大海戰に於ても司令長官海軍大將東郷

平八郎氏は、其戰捷の報告書に『天佑に依り』云々と書いて送られたのであります。人は或る見えない特別の力を要するのは之に依て見ましても明かで、其能力を要求する處に宗教の必要があるのであります。

宗教は人生第一の必要物でありまして、是が無ければ人は生れて生甲斐の無い者であります。或る詩人が申しました樣に、『宗教は人の第一に心配すべき事である』のであります。宗教は處世術以上、道德以上に必要なものであります。人は人生第一に必要なのは衣食住であるといつて、之が爲に日夜多大の勢力を消費しますが、人はパンのみで生くる者ではありません。人に食物を消化する胃の腑がありますと樣に、人には眞理を受ける爲に心がありまして、食物の缺乏によつて飢渴を感じまする樣に、知識の缺乏によつてもヤハリ精神上に飢渴を覺えます。それのみならず幾ら知識を得てもまだ〳〵

滿足する事の出來ない、ある空虛があります。聖書に『但し人の衷には靈あり、全能者の氣息人に聰明を與ふ』（約百記卅二章八）とか、『神はまた人の心に永遠をおもふの思念を賦け給へり』（傳道之書三章十一）とあります樣に、人には靈があり、永遠を想ふの思念がありまして、この靈魂即ち**自我の最も深い所に於て、神の氣息即ち永久の實在者內なる友人の靈を以て充されなければならぬ者があります。**宗教とは此深い領分を養ひ且つ充す事でありまして、これが人生の活力素であり、人をして人たらしむる處のものであります。

宗教の無い人は丁度積荷の無い船の如く、人生の波濤に逢ふては直に顚覆し易くあります。又生花の如くであつて、根がありませんから永續する事が出來ないのであります。我等日本國民は皇室に對し、國民に對し、町村に對し、家に對し、兄弟に對し、同族に對して多くの義務を有つて居りますが、若し其一でも缺ぎますと、我等

の生涯は實に憐れなものであります。けれども是を完全に滿足に果しましたならば、それで人生は平穏無事でありませうか、人生の波濤は打ち寄せて來ないでせうか、人が凡ての物を得ても猶ほ滿足する事の出來ないのは、其第一の義務即ち人類の父なる神に對する其子たる義務を盡さないからであります。

そして人の世はまた誠に怕ろしいものであります、支那の白居易(白樂天)は『人生行路の難きは山にあらず水にあらず、人情反覆の間に在り』とか、杜子美(杜甫)は『手を翻せば雲、手を覆へば雨、紛々たる輕薄奚ぞ數ふるを須ん』と申して居ります樣に、人情紙よりも脆い世の中でありますから、大なる心勞があります。羅馬の哲人セネカが其親友ルシラスに書を送つて、『我がルシラスよ、我に取りては生る事は戰ふ事である』と申しました樣に、生くる爲の戰が誠に强烈であります。此人ならばと信じて我心事を打明けた親友は、彼

は之を以て我を攻擊する材料とするではありませんか、實に今日の友人は明日の敵である如くに感じます。又適者生存は自然界の法則であるからといつて、弱肉强食主義で人を倒しても自ら進まんとする者が澤山ありまして、到る處に人生での敗殘者が悲鳴を擧げて我等に救助を求めて居るではありませんか。博士ムンデルが申しました通りに『此勞れ果てたる世の安からざるは神を求むる無聲の叫號である』と思はざるを得ないのであります。

さればといつて我れ自らに就て考へて見ましても、其の愛する者に別れた時には如何して慰藉を得ませうか、事業に失敗した時には如何して再び爲すの勇氣を得ませうか、國人に誤解せられ其家庭から捨てられた時には如何して立ちませうか、不治の病氣に罹つた時には如何して之に處しませうか、貧に迫つた時には如何して其生活を維持しませうか、死の手冷かに我を執へんとして待つて居る時に

は如何して其力強い手に打勝つ事が出來ませうか。更に考へて見ますと、世の中は善人が苦められて惡人が榮えて居る樣であります。されば彼等の同じ跡を踐んで惡に走らんとするには、良心の聲我を呵責して之を止めます。良心の聲に反いて惡を行ひます時には社會は嚴なる制裁を加へるではありませんか。又努めて惡を避けて善を行はんとしまする時に、猶一つ**力の不足**を感じます。使徒保羅が、

善なる者は我すなはち我肉に居らざるを知る、そは願ふ所我に在ども善を行ふ事を得ざれば也、我願ふ所の善は之を行はず反て願はざる所の惡は之を行へり、若し我願はざる所を行ふときは之を行ふ者は我に非ず我に居る處の罪なり……噫われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや。（羅馬書七章十八―二十四節）

と申しました通りの同じ歎聲が、常に我が心中から洩れるではありませんか。あゝこの暗黑の世界、人生の岐路に立ちて、光明を要す

る事切であります。

そして最後に考ふべきは**死の問題**であります、如何なる英雄も豪傑も是に接しては寸前暗黑、大なる恐怖を感せざるを得ないのであります。墓は彼等の終局でありまして、茲に來りますと萬事休焉、と是れ彼等の絶望的歎聲であります。太閤秀吉も其六十四年の生涯を顧みて『露とたち露と消えぬる我身なり、難波のことは夢の世の中』の悲鳴をあげて此世を逝つたではありませんか。故中村正直氏は學者で文章家で高尚な生涯を送つた人でありますが、其臨終の際に故奥野昌綱翁を顧みて、『予の生涯は四文八文の小使帳を付けたのに過ぎなかつた』と歎息せられたとの事でありました。獨逸の文豪ゲーテも正に此世を去らんとする時に『光を要す』と絶叫したのであります。神に在りて**永生**を有たない人は、死に際して斯くも寂寞くあるのを感ずるのであります。實に**人生最後の二分間**に其人の永

遠の運命が定まるのであります。即ち暗黒の彼方に光明を認むるか否かゞ、其運命の定まる所であります。**死に勝つの力、墓の彼方を明かに知り得るの途は何處にありますか。**これ實に基督教が我等に示さんとする處のものではありますまい乎。

希伯來の詩人が『あゝ神よ、鹿の溪水を慕ひ喘くが如く、我靈魂は爾を慕ひ喘ぐなり』（詩篇四十二一節）と歌ひましたが、想ふに我らの靈魂は常にこの活ける神を慕ひ待ち望んで居る者ではありませんか。人には靈と靈魂と肉との三性がありまして、靈魂即ち自我が靈に於て神と交り、自我が肉に於て物質界に接します。我等の自我が靈に於て神と交つた時に、茲に人生最深の要求が滿足せしめらるゝのでありまして、自我が肉を主とした時に、人生のあらゆる悲哀が彼を待つのであります。宗教は**靈なる神、內なる友人と內的生命の交通を**するものでありまして、この力が我に來つた時に人生の悲哀は變じ

て歡喜の生活となり、絶望は變りて希望の生涯となり、暗黒は變りて光明の世界となるのであります。宗教は**神と偕に歩む**事であります。これ程力强い事はなく、これ程幸福なものはありません。これを經驗して艱難多き人生をば、耐忍て通過る事が出來ます。活ける宗教を握つた者は實に最高の珍寶を獲た者であります。

第七章　志道の精神

道とは處世の道即ち人の踐むべき道であります。そしてこの道にも色々ありまして、先づ第一は地球上に在る道であります。昔の藤に世界の道路は羅馬に通ずといふ事がありましたが、我國で云へば日本の道路は東京に通ずといふのであります。どんな山奥から出で來ましても其目的の方を進んで行けば、遂に東京に達して宮城を仰ぐ事が出來るのであります。又學者になるとか商人になるとか農夫

になるとか、色々世渡りの途がありまして、其目的とする處に一心に進んで行きますならば、遂にはその途に通じて一廉の者となる事が出來ます。又人と人との交りの間にも道がありまして其道を踐み違へると困つた事になりますが、常に注意して行きますと、人交際の道も解つて來るのであります。志とは士の心と書まして、心に武裝して方向を定めて進んで行く態度を云ふのであります。すべて自分の志す道に向つて一直線に行けば之に通ずるといふ事は、明かに分つて居ります。道は行詰りでは駄目でありまして、この通ずるといふ事が眼目であります、從つて志の立方が間違つて居らず其一歩踏み出す時を誤りさへせねば、之に通ずる事は出來ます。

けれども實際に世渡りを致します時には、この道に志して進みますけれども、不案内の箇所が多いので兎角迷ひ易くて困るのであります。屢々ばたと行詰つて二進も三進もならないで逆戻りをして出

直さねばならぬ事も、屢々あるのであります、これは本當に道の本源を知らぬ爲なので、人生の地圖を手に入れる事が必要であります。航海する人にとりては海圖と水先案内とが一番大切でありまして、若し之が無いならば遂に暗礁に乗上げて破船するに至ります。

道といふ字は首と走との二字から出來て、首走りて天に達するといふ意義があるさうであります。ですから人として人らしい道を守り、人らしい生涯を送らうと思ひますならば、どうしても心眼を高く天に擧げて、人類の大理想たる道の本體を認め、之に達するの進路と方針とを追求むることが大切であります。若し之を怠りますならば、これ程不幸な事はありません。

道の本體とは何でありまするか、道の本體は死物ではなくして活物であります。空々漠々たるものでなくて然り否なといふ誠に明白なものであります。道の本體は何であるかではなくして誰であるか

であります。そしてこの道の本體とはイエス・キリスト彼れ自身でありまして、人はこの道の本體を識つて始めて人の人たる道を踐み行ひ、之に通ずる事が出來ます。即ちあらゆる人生問題、道德問題、宗教問題も、歸する處はこの道の本體たるイエスに對する解釋如何によつて定まるのであります。イエスは仰せられました、

我は途なり眞なり生命なり、人もし我に由ざれば父の所に往くと能はず。（約翰傳十四章六節）

さ、人生の目的は神を識るに在りますが、この神を識る爲には、その道なるイエスを識る事が大切であります。イエスに於て始めて神の性格が明かに示されて居りまして、人が見んと欲して見る事の出來なかつた其神を、明かに識る事が出來ます。そしてイエスは人としての模範を示されましたから、人は如何に生涯すべきものか、即ち如何に生き如何に働き如何に死し如何に復活すべき者であるかを

教へられました。

或人は申します、『わけ登る麓の道は多かれど、同じ高嶺の月を見るかな』で、何れの道から行つても遂には神を識る事が出來るといふのであります。然しこれは一面の眞理を見て、一面の眞理を見失つたものであります。宗教には二種あります、甲は人間を以て始りまして、人間の努力によりて神との交通を求めたもので、種々の偶像教や多神教其他多くの世界に在る宗教であります。是等は皆或は探り得る事あらんかと思ふて、人間知力の考へ得らるゝ或る仕方に於て、或は人間の意志の行ひ得る或る實行に由て神を求めたものであります。これ等は其目的を達したかと申しますに、決して之に通じては居りません。個々の心靈に不死の靈感を與へ、人間の高い標準に於ける生活を示さないのであります、乙は神を以て始まり、或る全く神聖な方法によつて人を求められたのであります。基督教が

他のあらゆる宗教と違ふ點が茲にあるのでありまして、**イエス・キリストは神の完全なる示現**であります。

太初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神なり……それ道肉體と成りて我儕の間に寄れり、我儕其榮を見るに實に父の生給へる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり……律法はモーセに由て傳はり恩寵と眞理はイエス・キリストに由て來れり、未だ神を見し人あらず、惟うみ給へる獨子即ち父の懷に在る者のみ之を彰せり

（約翰傳一章一—十八節）

と使徒約翰が、**耶蘇基督**に對する信仰を述べて居りますが、この信仰は一千九百餘年間、多くの人の實驗によつて證明せられたものでありまして、**耶蘇基督**に於て初めて人類の**父なる神**の義と愛とを識る事が出來、眞正に神と交通するの道が開かれたのであります。

そしてこの耶蘇基督を識る爲には、聖書を研究する事が大切であ

ります。聖書は舊新約全書合せて六十六卷ありますが、其中心點は耶蘇基督でありまして、舊約は神が救主を降さんとし給ふ約束で、新約は救主なる耶蘇を信ずる者の救濟の完成の約束であります。然し此聖書の眞正の意味を解し、耶蘇基督を識らん爲には、其耶蘇基督の**體たる教會**に來る事であります。教會に於て其活ける靈感に觸れて、其本體を明かに知り得るに至ります。

然し現今の道に志す者に就て大に憂ふべき點は、眞實にこの道の本體たる耶蘇基督を識らん爲に志すのではなくて、教會に來りて利益に預らんとする事であります。これは大なる出發點の誤りでありまして必ず行詰るのであります。志道者は常に耶蘇基督に使はれ、神の僕として神に服從する精神が必要であります。耶蘇基督を利用し教會を利用せんとする者は、遂に自ら棄てらるゝに至ります。之に反して耶蘇の忠實なる弟子となり、その僕となり、その友となり、

て人生を送らんとする者は、永久に耶蘇と偕に在りて父なる神の恩惠に觸れ、眞理を悟りて永生に至る事が出來ます。

基督教の研究者が先づ第一に心得べき事は、其動機を正しくする事であります。耶蘇基督に使れん爲に研究するのであるか、耶蘇基督を使はん爲に研究するのであるかを明かにする事であります。そして自分の卑い賤しい慾望を棄てゝ、正しい精神を抱いて心の眞空に耶蘇基督の靈力を受けんとして來る事が必要であります。即ち自己の弱く小なる事、罪深き事を悟り、謙遜して罪の赦免を得ん爲に十字架にかゝり給ひし耶蘇基督に縋る事、來世の信仰を得て死に勝ち、人生の眞正の勝利者とならんとする事であります。

日本國民と基督教　終

大正六年八月廿九日印刷
大正六年九月　六　日發行

定價　金貳拾錢

不許複製

著作者　京都市大佛妙法院前側町四百三番地　横田秋生
發行者　神戸市下山手通五丁目十五番　ヒユ、ゼ、フヲス
印刷者　神戸市吾妻通三丁目　菅間德次郎
印刷所　神戸市吾妻通三丁目　福音印刷合資會社神戸支店
發行所　神戸市中山手通り三丁目外五番　日本聖公會出版社

△廣　告▽

■洗禮のしたく

ミッス・エ・シ・ボサンケット著

四六版　定價六十錢
三百頁　郵税八錢

求道者を導き洗禮の準備をなすに當り、秩序的に基督教々理を學ばしむべき平易簡明なる適書をとの要求は屢々男女教役者の發せらるゝ所なり、本書は此の要求に應せんため著者が多年の實驗に基づきて編せられたるものなれば、志道者の教養、初信者の養信的讀物として實に必需好適の要書なり。

■基督の奇蹟の特質

長老シ・フォクスレー著

菊版半截　定價六錢
二十五頁　郵税五冊迄二錢

右は福音書中にあるキリストの奇蹟の動機、目的及其機會と結果等に關し其の特質を擧げ從來世に流布せる神話的傳説と類を異にせる點を示せり。基督の性行に對する疑惑を解くに最適肝要なる小冊子なり。

立教學院校長哲學博士元田作之進著

■再版　未信者に與ふる書

四六版　定價十錢
八十頁　郵税二錢

「とつて讀め」とは聖アウガスチンが改宗の動機となりたる天來の聲なりき、我社は天來の此の聲に接して讀むべき物を求むる世の未信徒諸君に本書を提供するの光榮を有す。本書は既に我が傳道界に頗る好評を博し再版將に賣切れんとす。とりて讀め『未信者に與ふる書』を。

長老　山縣雄杜三譯

■三版　公會入門

菊版半截　定價十二錢
九十七頁　郵税二錢

稍進みたる志道者が衷心神に事へんと決心して先づ手に取るべきは本書なり、内容は信經、主の禱、十誡、教會に關する訓誡、信徒按手式、聖餐、生涯訓、祈禱其折々の小祈禱、祈禱に關する簡易の規則、及主の禱の用法等なり。

露光量違いの為重複撮影

325
528

NO.
PATENTED NO. 119016
"F-M"
PAMPHLET BINDERS
are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thickness
851(菊倍)	30.cm.	x 22.5cm.	x 1cm.
852(四六倍)	26. ,,	x 18.5 ,,	x 1 ,,
853(菊)	22.5 ,,	x 15. ,,	x 1 ,,
854(四六)	18.5 ,,	x 12.5 ,,	x 1 ,,
855(特)	24. ,,	x 15. ,,	x 1 ,,

other sizes are made to order
LIBRARY SUPPLIES OF ALL KINDS
F. MAMIYA & CO.
OSAKA - TOKYO - FUKUOKA

サーオリバーロッヂ原著　宍倉文學士譯
■宗教問答　四六版　定價十錢　六十頁　郵税二錢
本書はアース、アンド、ヘブンと題する原著の譯書にして哲學的方面より宗教の要義を問答體に説ける書なり、知識階級の志道者、及神學生には頗る興味ある好著也
ミセス・ピカステス著
■參版福音入門　四六版　定價八錢　八十六頁　郵税二錢
求道者に福音史の梗概を學ばしむる便利のために美はしき筆を以てキリストの御性行を述べたるもの即ち本書なり。傳道用、殊に婦人の志道者に讀ましむるに最も適良の冊子なり。
著者匿名（近刊）
▲傳道者
右は聖公會傳道叢書第二卷として近々發刊す。本書は傳道用冊子懸賞募集の結果第二等賞として採用せられたるものなり。
神戸市中山手通三丁目外五番
日本聖公會出版社（振替大阪九一〇九）

露光量違いの為重複撮影

325
528

NO.
PATENTED NO. 119016
"F-M"
PAMPHLET BINDERS
are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thickness
851(菊倍)	30.cm.	x 22.5cm.	x 1cm.
852(四六倍)	26. ,,	x 18.5 ,,	x 1 ,,
853(菊)	22.5 ,,	x 15. ,,	x 1 ,,
854(四六)	18.5 ,,	x 12.5 ,,	x 1 ,,
855(特)	24. ,,	x 15. ,,	x 1 ,,

other sizes are made to order
LIBRARY SUPPLIES OF ALL KINDS
F. MAMIYA & CO.
OSAKA - TOKYO - FUKUOKA

サーオリバーロッヂ原著　宍倉文學士譯
■宗教問答　四六版　定價十錢　六十頁　郵税二錢
本書はアース、アンド、ヘブンと題する原著の譯書にして哲學的方面より宗教の要義を問答體に說ける書なり、知識階級の志道者、及神學生には頗る興味ある好著也

ミセス・ピカスラス著
■參版福音入門　四六版　定價八錢　八十六頁　郵税二錢
求道者に福音史の梗概を學ばしむる便利のために美はしき筆を以てキリストの御性行を述べたるもの即ち本書なり。傳道用、殊に婦人の志道者に讀ましむるに最も適良の冊子なり。

著者匿名　■（近刊）■
▲傳道者
右は聖公會傳道叢書第二卷として近々發刊す。本書は傳道用冊子懸賞募集の結果第二等賞として採用せられたるものなり。

神戸市中山手通三丁目外五番　日本聖公會出版社（振替大阪九一〇九）

終